八重山型石斧の基礎的研究（4）

高宮廣衛

はじめに

八重山地方には筆者が八重山型石斧と仮称した一種独特の石斧が存在する（註1）。粗雑な器面調整、狭刃型石斧の存在などに特徴の一端が伺えるが、今のところ、類例は周辺地域では知られていない。

ところで、八重山地方の新石器文化は土器を伴う有土器文化と土器を伴なはない無土器文化に大別され、有土器時代については土器による細分編年が可能であるが、無土器時代については土器による細分編年はほとんど期待できない。したがって、無土器時代の細分編年にあたっては石器に頼らざるを得ない。そのような状況から筆者は同地方に普遍的に存在する石斧に着目して形態分類を試みてみた。その結果、少数の例外を除けば平面形態は撥型、短冊（含方形）型、狭刃型（逆撥型）の3類に大別でき、他方、横断面の形態は厚型、薄型（扁平）のほか、その中間型態の3型態にほぼ大別できることを知った（註2）。

無土器時代の石斧については以上のような大要を把握できたが、無土器時代の石斧とこれに先行する有土器時代の石斧がどのような関わりを持つのか、両者間における系統関係の有無について検証する必要がある。まず、その前段階の作業として、本稿では前稿の後を受けて、有土器時代の石斧に関する諸形態のうち、今回は平面形態と断面形態につて観察を行う。

第1節　平面形態

I）平面形態の分類

石斧の平面形態は、基本的には前回無土器時代の石斧について行った観察と同じように、狭刃型（逆撥型）、短冊（含方形）型、撥型の3類に大別できる。しかし、本稿では狭刃型のうち前回一括して取り扱った短銃型と逆瓶型を分離し、それぞれ独立した項目を設け、その有効性の有無を探ってみた。また前回、細分の必要性を痛感しながら時間上の制約から報告に間に合わなかった短冊型、門札型、撥型の3型態については後述のようにそれぞれ最大限の6サブタイプを設定した。細分することによって時間差や地域差を見出すことができるのか、その確認作業のためである。まず、狭刃型から説明する。

狭刃型にはさまざまなタイプが見受けられる。これらを第1表（6頁）のように8つのサ

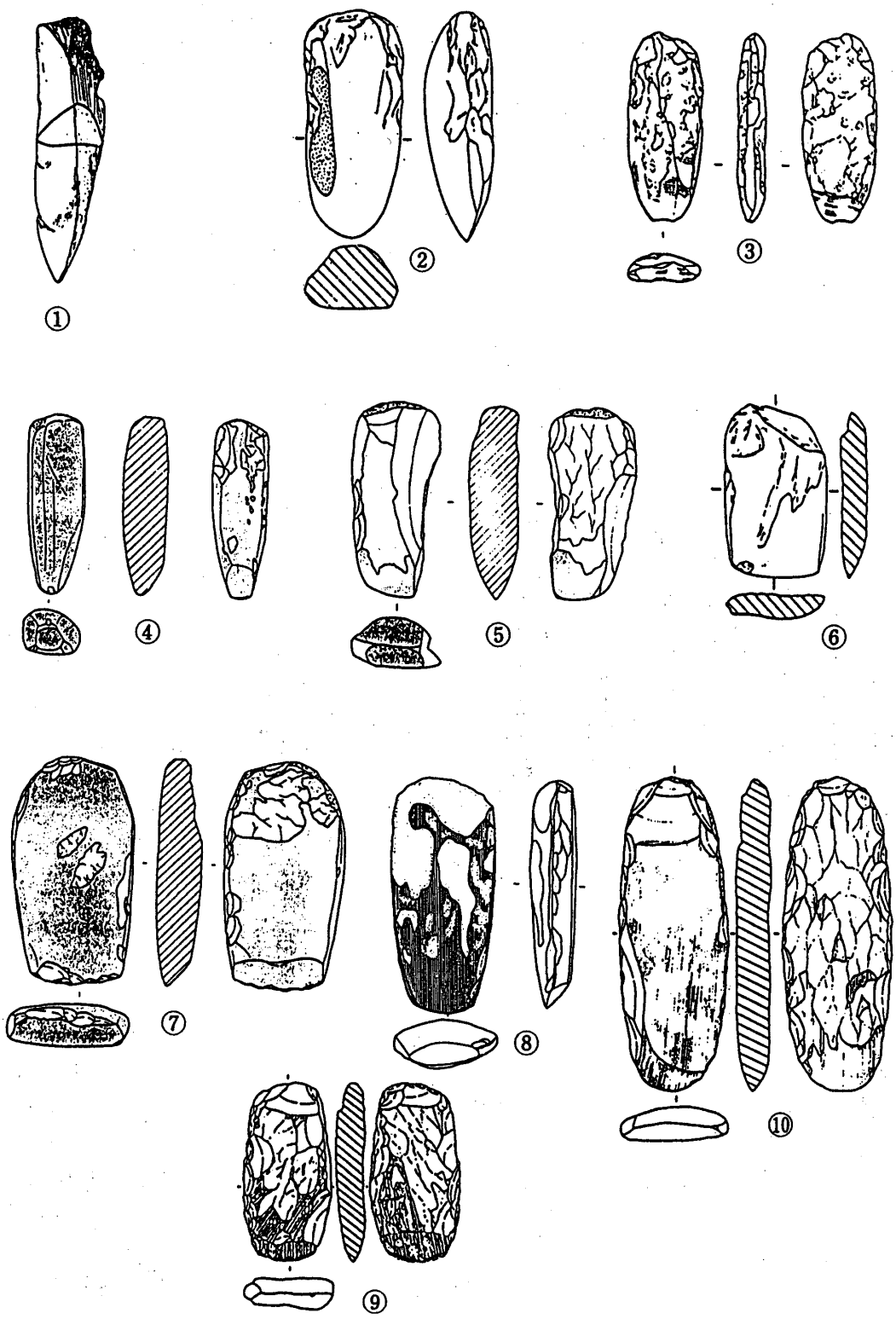
註1　高宮　廣衛「八重山型石斧の基礎的研究（3）」『南島考古』第15号、沖縄考古学会、1995
註2　高宮　廣衛「八重山地方新石器無土器期石斧の推移（予察）」『南島考古』第14号、沖縄考古学会、1994

ブタイプに細分したが、細分に際してほとんど問題なく分類できる資料は少なく、大多数は平面形がラフで、分類困難なものが多い。モデルを第1図に示した。狭刃型は各表の番号4欄に先述のサブタイプ（逆瓶型）を新設した。前回短銃型に含めていたものである。この番号4以外のサブタイプは前回と変りはないが、形態の近いものをグルーピングするよう再編したため、表中の配列は前回（註2）と異なる結果となった。

表番号の1は逆三角形ないしはそれに近い形態を有するもので、幅広の頭部から先端へ、ほぼ直線的に先細りするいわゆる楔形タイプである（第1図1）。2は刃部が舌状の丸みを帯び、頭部から刃部への斜度が緩やかなものでカモメノクチバシ形と仮称（同図2）。同図3は2に類似するが、両側縁が平行あるいはほぼ平行し、刃部の平面観は舌状の丸みを帯び（但し、本標品は刃縁が欠け、直刃状を呈している）、全体的に短銃（ピストル）弾状の概形（同図3）を有するもの（旧表の7＝旧表とは文献2、以下同じ）。同図4は先述した新設の逆瓶型（旧表の7）。前項の3と違って平行の両側縁からやや角度をもって刃部へ至るもの。つまり、瓶を逆さにしたような狭刃型（同図4）、あるいは尖基式17BやCの尖基部に刃を付したようなタイプ。同図5は細長の逆台形（旧表の3）。同図6はトランプのカード形だが、刃部の幅が頭部よりやや小さく鉋刃状を呈する。この種のサブタイプAは方形に近い狭刃型（同図6），.Bはやや丸みをもつ方形状（同図7）。同図8は平面の形態が6Bに類似するが、倒卵形（各表7）に分類できるもの（旧表の4）。同図9は楕円形で、Aは通常のタイプ（表中の8A）、Bは長めの楕円形である（同図10）。なお、本稿で以後「類型」を指す場合は「型」を用い（例、短冊型・撥型等）、サブタイプには「形」（例、短冊形・楔形等）を用いることにする。

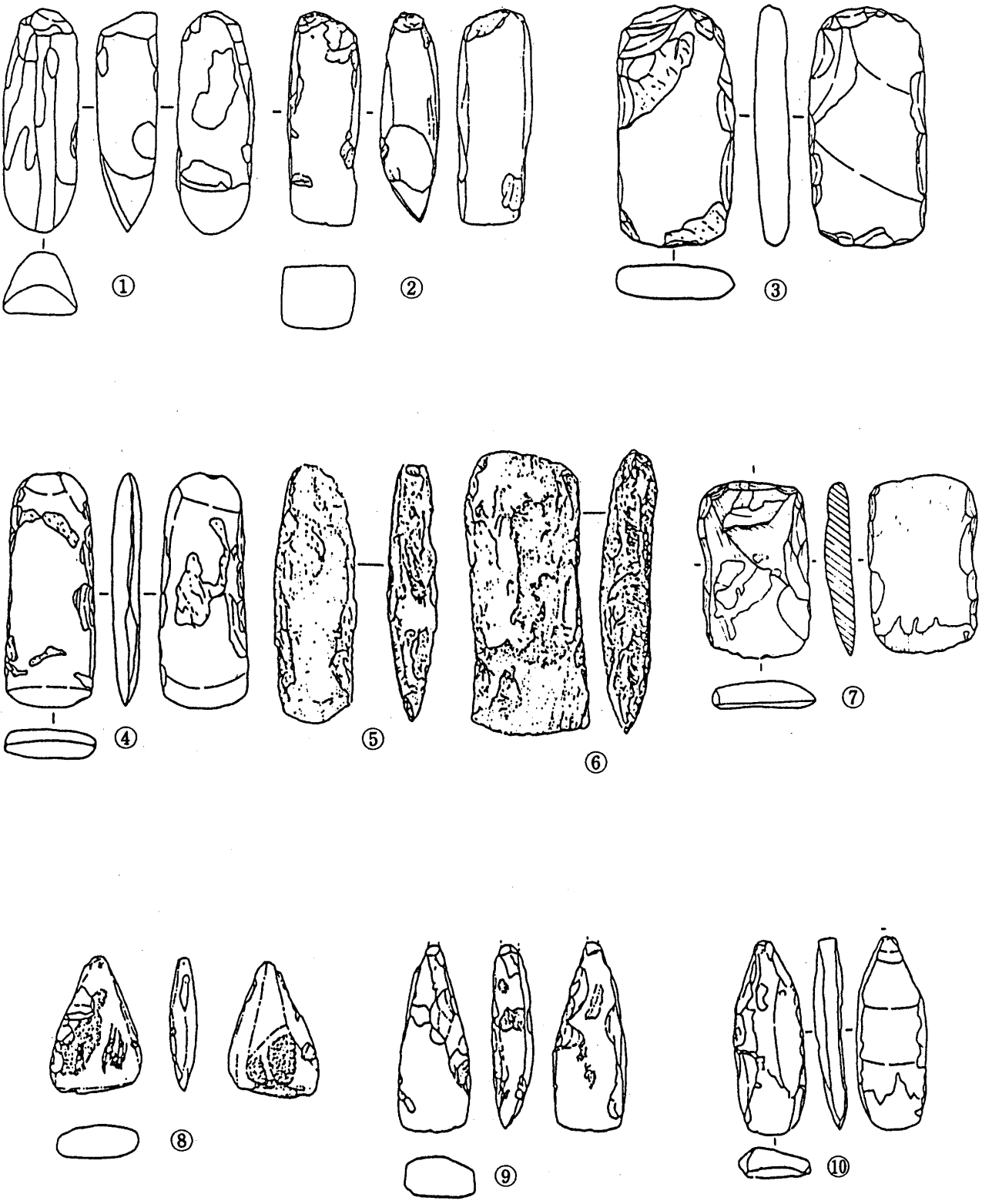
短冊型は門札（表札）型および方形状のものを含め、前回と同じ5種（表番号の10～14、以後、単に表10～14と略称）で増減はない。ここに分類するものは両側縁が平行もしくはそれに近似する側縁形態をもつものである。表10（第2図1）は上下両端が丸みをもつカプセル形。表の11（第2図2）は横断面が方形もしくは厚手の長方形で箸箱状を呈し、方柱状石斧と呼ばれるものである。表12は短冊型、同13は短冊型より短軀的な門札型。同14は方形に近いトランプカード形の計5種で、いずれに属するか不明のものを表15の欄に記入した。

上記5種のうち表12の短冊型（第2図4～6）と表13の門札型（同図3）をそれぞれA～Fの6つのサブタイプに細分した。そのうち基本タイプはA・C・Eの3タイプ（例＝第2図4～6）で、B・D・Fの3タイプはそれぞれの中間型である。つまり、サブタイプAは短冊型・門札型とも典型的な例で（第1表）、両側縁がほぼ平行する。Cは両側縁が凸側縁となって外側へ膨らむもの（第1表）。Eは逆に両側縁が凹側縁となるものである（第1表）。BはAとCの中間タイプ、すなわち片方の側縁は直線的で、他の側縁が凸側縁となるもの（左右いずれでもよい）。DはCとEの中間タイプで、片方の側縁は凸側縁だが、他の側縁は凹側縁となるもの（左右いずれでもよい）。FはEとAの特徴を有するもので、片方の側縁は直線状を呈し、



第１図　狭刃型のサブタイプ

１）楔形（下田原貝塚、文献３）、２）カモメノクチバシ形（船浦貝塚、文献11）、３）短銃形（トゥグル浜貝塚、文献12）、４）逆瓶形（下田原貝塚、文献５）、５）逆台形（大泊浜貝塚、文献５）、６）鉋刃形Ａ（船浦貝塚、文献11）、７）鉋刃形Ｂ（下田原貝塚、文献５）、８）倒卵形（大田原遺跡、文献７）、９）楕円形Ａ（神田貝塚、文献13）、10）楕円形Ｂ（大田原遺跡、文献６）



第２図　石斧の主要な平面形

１）カプセル形（赤崎貝塚、文献14）、２）柱状石斧（船越貝塚、文献15）、３）門札型（赤崎貝塚、文献14）、４）短冊形Ａ（赤崎貝塚、文献14）、５）短冊形Ｃ（仲間第１貝塚、文献４）、６）短冊形Ｅ（仲間第１貝塚、文献４）、７）トランプカード形（大田原遺跡、文献６）、８）尖基式Ａ（船越貝塚、文献15）、９）尖基式Ｂ（船越貝塚、文献15）、10）尖基式Ｃ（赤崎貝塚、文献14）

他の側縁は凹側縁となるもの（左右いずれでもよい）で、計６つのサブタイプとなる。

方形状のトランプカード形（表14、第２図７）も今後の資料によっては短冊型と同じように６サブタイプが必要となるかもしれないが、現在のところヴァリエイションが少なく、必要最小限にとどめた。表示した３例は典型的なカード形（A）と両側縁が外側へ張り出す凸側縁（B）および凸側縁と凹側縁を組み合わせる（C）タイプである。

撥型は前回と同じように典型的な撥型（表16）と基端が尖る、いわゆる尖基式（表17）の２種に細分した。撥型も短冊形と同じように６つのサブタイプを設けた。サブタイプの基準は短冊型や門札型と同じで、A・C・Eが基本タイプ。B・D・Fはそれぞれの中間型である。各サブタイプの特徴については短冊型や門札型の項に記したので、ここでは省略する。破損品のうち、いずれに属するか不明のものを18の欄に記入した。尖基式のサブタイプは前回同様３種である。Aは全体的に三角形を呈するもの（第２図８）、Bは胴中央部あたりから尖基式になるもの（同図９）、Cは頭部のみ尖基式の形態をとるものである（同図10）。

平面形のタイプおよびサブ・タイプを以上のように分類してみたが、八重山型石斧は形態の粗雑なものが多く、実際の分類に際しては、いずれに分類すべきか迷うことが多い。できるだけモデルに忠実に分類したつもりである。次に各遺跡の出土例につて概観する。

II）各遺跡における出土例

下田原式土器文化時代の遺跡で発掘あるいは試掘調査が行われた遺跡は５カ所である。本文ではこの５遺跡で出土あるいは採集された石斧についてみていくことにする。

A）下田原貝塚

下田原貝塚ではこれまで、金関丈夫を団長とする八重山調査団（昭和29年、以後国分資料と略称）、早稲田大学八重山調査団（昭和34年、以後早大資料と略称）、県教育委員会（昭和58～60年、以後県教委と略称）による３回の発掘調査が行われている。ここでは調査の古い方から見ていくことにする。

①　国分資料（註３）

国分資料には発掘による層位資料と表採資料の２種がある。まず、層位資料から見ていくことにする。層序は基盤も含め４層からなる。第Ｉ層は黝黒色土層の耕土、第II層は暗褐色土層の旧耕土、第III層は黒色の混貝土層（包含層）、第IV層は基盤の赤褐色粘土層である。

註３　金関丈夫・國分直一・多和田真淳・永井昌文「琉球波照間島下田原貝塚の発掘調査」『水産大学校研究報告人文科学篇』第９号、1964

第１表　下田原貝塚採集石斧（國分資料）の平面形態

タイプ	狭刃型											短冊型																		撥型										合計
サブタイプ	1	2	3	4	5	6		7	8		9	10	11	12						13						14			15	16						17			18	
層序						A	B		A	B	不明			A	B	C	D	E	F	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	
Ⅰ層					1																									1										2
Ⅱ層					1						2																													3
Ⅲ層										1				1		1						1								1									1	6
計					2					1	2			1		1						1								2									1	11
表採																																								
2区											2	1						1						1					3											8
5区																														1	1	1	3	2				1		9
6区					2															2									2	1			1		1					9
7区					1																	3			1				1	1				1	1					9
8区					2										1	1						1							1	1	1							1		9
9区	1													1		1													1			1		2				1	1	9
計	1				5						2	1		1	1	2		1		2		4		1	1				8	4	2	2	4	5	2			3	1	53

発掘による資料は11点である。そのうち石斧の全景が把握あるいは推定可能な資料は6点で、他の5点は頭部あるいは刃部の破片である。平面形による分類は狭刃型5点、短冊グループ3点、撥型3点の計11点で、狭刃型が総体的に多い（第1表）。

狭刃型は第1表（以下表名を省略）の（5）の逆台形が2点、（8B）の長楕円形が1点、あとは頭部と刃部の破片（9）がそれぞれ1点である。逆台形は形態がやや明瞭なものと短冊型に近いものがそれぞれ1点出土しているが、いずれも第I・II層の耕土からの出土である。長楕円としたものはやや変則的なもので、下半部はやや丸みをもって刃部にいたるが、上半部は頭部へ急に細くなり、尖基式（17）のBに近似するが、胴下半部が狭刃的なので、楕円形の変形として分類した。第III層の出土である。不明の2点のうち1点は頭部から刃部へ幅を減ずるタイプで（4）か（5）の資料と見られる。他の1点は刃部の破片で、胴部へ不規則に拡大する粗雑なもの。表示したサブタイプに組み込めない例外的なものである。

短冊型は2点で、サブタイプAとCがそれぞれ1点出土している。いずれも第III層の出土である。Aの1点は刃部をわずかに欠くが、完形に近い。両側縁の上部に抉り様の凹部が認められる。Cの1点もほぼ完形で、両側縁がわずかに凸側縁となる。(13) の門札形は1点でCに属する。やや精巧な完形品で、第III層の出土である。

撥型の3点はいずれも破片で、2点は刃部、他の1点は刃部に近い胴部の破片である。刃部の2点は刃部から頭部に向けて幅を減じているので撥形と推測でき、そのうちの1点は両側縁が直線的に開くタイプで、Aに分類できる。他の1点は分類不能。刃部の2点はいずれも第III層の出土。胴部破片は刃部の方向へ幅が拡大しており、撥型のサブタイプAの特徴を備えている。第I層の出土。

次は表採資料についてみてみよう。2～9区と呼ばれる地区で表採された石斧が図示されている（第1表）。

2区の資料は8点図示されている。2点は狭刃型だが、全体形がつかめず、不明（9）の欄に分類した。そのうちの1点は横断面が三角形を呈する片刃状の精巧な製品だが、刃縁と頭部を欠くため、全体形がつかめない。短冊型の中にはカプセル（10）タイプの見事な完形品が1点表採されている。一見、乳棒状様の精巧な製品である。他の短冊型はサブタイプのEに属するものが1点採集されているが、粗製品である。門札型のEに属するものも1点採集されているが、平面形は粗雑である。短冊型か門札型に属する刃部・頭部の破片が3点採集されている。両側縁は平行しており、いずれの類型に属するにせよ、サブタイプAの資料と見られる。

5区の表採資料は9点である。すべて撥型で、他の器形は含まれていない。2点は頭部を欠くが、概形は把握できる。

5区の撥型（16）は8点で、サブタイプF以外はすべて採集されている。A～Cのサブタイプに属するものは典型的なものだが、他は粗雑で分類に苦労する。(17) の尖基式はサブタイ

プのCが１点表採されている。しかし、きわめて雑で、意識的に整形したものとは考えにくい。サブタイプAに分類することも可能である。

６区採集の石斧は９点図示されている。完形は５点、他は頭胴部の破片が３点、刃部の破片が１点である。

本区では狭刃型の完形品が２点採集されている。１点は（５）の逆台形に属するもので、他の１点は両肩を有する両端刃石斧の珍品である。後者は上下の刃部とも平面形は狭刃型に属し、肩が形成されていなければ、（５）の逆台形タイプに分類できるものである。厳密にはこの種のサブタイプを設けるべきだが、１例だけなので特にサブタイプを設けることはせず、（５）の例外として取り扱うことにした。

短冊型は採集されていないが、門札型は２点採集されている。２点ともサブタイプのAだが、外形は粗雑である。不明（15）の２点は頭部の破片で、両側縁は平行しており、短冊型か門札型のサブタイプAに属するものであろう。

撥型は３点である。Aの１点は頭部の破片だが、刃部への側縁の広がり方からAに分類できるものである。サブタイプDの１点は胴刃部の破片で、両側縁とも整形はラフである。他の１点はサブタイプのFに属するもので、頭部は尖形を呈しており、17Cに分類することも可能だが、意図的な加工によるものではなく、（16F）に分類した。

７区も表採資料が９点図示されている。頭部の破片を１点含むが、他は完形もしくはそれに近い資料である。

狭刃型は（５）の逆台形の良好な資料が１点得られている。短冊型は採集されていないが、門札型は４点あり、そのうち３点はサブタイプのCに属するもので、ややずんぐりした形を呈し、そのうち２点の両側縁は明瞭な凸側縁だが、他の１点は輪郭がそれほど明瞭ではない。サブタイプFの１点も両側縁の整形はラフである。（15）の不明欄の１点は刃部を欠くが、実測図から推定するとカード形に近い。右側縁は凹側縁だが、左側は欠損のため推定不能。

撥型は３点である。１点はサブタイプA,他の１点はサブタイプのE,残りの１点はサブタイプのFで、いずれも製作は粗雑である。

８区の資料も９点図示されている。頭部を欠く資料が２点、あとは完形もしくはそれに近い資料である。

狭刃型は２点含まれている。１点は短冊型に近いものだが、刃部へ向かってわずかに幅を減じている。他の１点は頭部を欠くが、外形から（５）に分類できるものである。短冊グループは不明のものを含め４点採集されている。短冊型は２点で、サブタイプのBとCが各１点、平面形は雑である。門札型はサブタイプのCが１点採集され、端正な見事なものである。不明の１点は頭部を欠き、そのため短冊型か門札型か不明のものだが、両側縁は平行しており、いずれの場合でもサブタイプAに属するものであろう。

撥型は３点である。（16）のサブタイプAとBがそれぞれ１点、いずれも製作は粗雑である。

(17) の尖基式は1点で、サブタイプのCに属する。しかし、尖基部分の両側縁は対象になっておらず、ややいびつである。

9区の資料も9点図示されている。胴部の破片が1点、頭部や刃部を欠く破片が各1点、他は完形の資料である。

狭刃型は（1）の楔形が1点採集されている。典型的なタイプで（第1図1）、完形品である。短冊グループは3点で、1点はサブタイプのAに分類でき、規格的な精巧なものである。他の1点はCのサブタイプだが、両側縁とも不規則な凸側縁である。残りの1点（15）は頭部のみの半欠品だが、両側縁はほぼ平行しており、短冊型か門札型のAに属するものであろう。

撥型は4点である。(16) の撥型はCが1点、Eが2点採集されているが、外形はラフである。尖基式（17）はサブタイプのCが1点採集されている。尖基部は人頭様の丸みをもつもので、典型的な尖基式とは若干器形が異なっている。不明の1点（18）は頭部と刃部を欠くが、一方の側縁は直線、他の側縁は凸側縁に属するもので、(16) のサブタイプであればFに分類できるものである。

以上、下田原貝塚の國分資料を紹介したが、この地域には無土器時代の大泊浜貝塚が隣接して存在する。当時は大泊浜貝塚の存在は知られていなかった。したがって、表採資料には大泊浜貝塚の資料を含む可能性もある。

② 早稲田資料（註4）

昭和34年（1959)、早大によって試掘調査が行われた。トレンチにおける層序は第Ⅰ層＝耕土、第Ⅱ層＝暗褐色土の混貝層、第Ⅲ層＝暗褐色土の無遺物層で、その下は石灰岩の岩盤であった。石斧は8点図示されているが、そのうち6点は混貝層からの出土で、他の2点は表採品である（第2表)。表内の（　）は打製である。

層位資料の6点はすべて磨製石斧である。狭刃型1点、短冊グループ1点、撥型4点の計6点で、次項の県教育委員会による採集比率と異なり、撥型がやや多い。

狭刃型の1点は（5）の逆台形の細長いタイプ。短冊型の不明欄（15）に分類した1点は胴部の破片で全景は不明だが、現存部から推すと、(12) のサブタイプAの可能性が高い。丹念な磨製の見事な胴部破片である。

撥型のうち3点は（16）のA・C・Eに属するもので、特にAの1点は定角型と報告されているように規格的な見事なもので、研磨も徹底している。他の2点は側縁部に打裂痕を多く残し、その意味では粗雑な作りだが、一応外形は明瞭である。(17) のサブタイプCは図からすると局部磨製だが、半磨製と表示されており、あるいは裏面が半磨製なのかもしれない。均斉のとれたタイプCである。

註4　滝口宏編『沖縄　八重山』校倉書房、1960

第２表　下田原貝塚（早大資料）出土石斧の平面形態　　（　）は打製

タイプ／サブタイプ／層序	狭刃型											短冊型																		撥型										合計
	1	2	3	4	5	6		7	8		9	10	11	12						13						14			15	16						17			18	
						A	B		A	B	不明			A	B	C	D	E	F	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	
表土																													1(1)											1(1)
II層					1																								1	1		1		1				1		6
計					1																								2(1)	1		1		1				1		7(1)

表土出土の2点は短冊型か表札型に属する破損品である。1点は均斉のとれた磨製の刃部破片、他の1点は打製で器面は剝離調整のみで終わっている。

早大の資料は以上であるが、狭刃型、短冊型、撥型の出土量が後述の県教育委員会のものに比べアンバランスになっている。このことは出土量の僅少性に基因するものであろう。他方、規格的な見事なものが2点含まれており、この点は県教委採集のものにも通じ、本遺跡の特徴の一端を示しているように思える。

③　県教育委員会による資料（註5）

昭和58から60年にかけて実施された発掘調査により多数の石器が得られている。層序は各発掘区によって若干異なるが、基本的には地山も含めて4枚あり、第I層＝表土，第II層＝淡黒褐色土層、第III層＝黒褐色土層、第IV層＝赤褐色の地山の4枚で、第III層が遺物包含層である。第II層は大部分が耕作によって撹乱を受けているという。石斧は161点得られている。そのうち完形ないしは完形に近い資料が64点図示されている。ここでは図化された64点と叩き石に転用された3点の計67点についてみていくことにする。

器面に研磨痕の認められるのは62点で、他の5点は打製である。後者はすべて撥型に属し、狭刃型や短冊グループに打製は含まれていない。まず、磨製石斧の平面形から見ていくことにする（第3表)。表内の（　）は打製石斧。

狭刃型は23点で、磨製全体の約1/3強に当たり、本遺跡における石斧のメインタイプの一つといえる。（3）の短銃弾形以外はすべてのサブタイプが得られている。第3表のように遺物包含層からの出土が若干多い。また、サブタイプとしては（1）の楔形や（2）のカモメノクチバシ形、（6）の鉋刃状のものが他のタイプに比して若干多い。

平面形についてみると、全面磨製の比較的形の整ったものや、打剝調整によって側縁部が若干ジグザグしているものもあるにはあるが、後者も概して左右はほぼ同形になっており、不規則なものは少ない。層位別に見てみると、狭刃型は表採と第I層で半数近くの10点が出土している。第II層は9点で、層位的に最も多い。第III層は4点である。層位的に見ても狭刃型は下田原貝塚のメインタイプの1つといえる。

短冊型のグループは18点得られている。カプセルタイプ1点のほか短冊型12点、表札型5点、カード形1点の計18点である。層位的に見ると、第3表のように表採や表層出土のものが多い。

カプセルタイプとしたものは大部分が打製で、研磨面は少ないが、両側縁はほぼ平行し、その点では短冊型に類似する。しかし、頭部と刃部が丸く整形され、カプセル状を呈している。第I層（表土）からの出土である。

註5　沖縄県文化財調査報告書第74集、『下田原貝塚・大泊浜貝塚』沖縄県教育委員会、1986

第３表　下田原貝塚出土石斧（県教委）の平面形態　　（　）は打製

タイプ	狭刃型											短冊型																		撥型										合計
サブタイプ	1	2	3	4	5	6		7	8		9	10	11	12						13						14			15	16						17			18	
層序						A	B		A	B	不明			A	B	C	D	E	F	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	
表採	2	3		1					1					2	1	1	1					1					1			2	3	3								22
Ⅰ層					1	2						1		1		2	1															1								9
Ⅱ層	2	2					4			1				1	1						1									2	1(1)	1(1)	1		(1)					17(3)
Ⅲ層	1	1		1	1										1					1	1			1							2	1	1	1	1				(1)	14(1)
Ⅳ層																																(1)								(1)
計	5	6		2	2	2	4		1	1		1		4	3	3	2			1	2	1		1			1			4	6(1)	6(2)	2	1	1(1)				(1)	62(5)

短冊型はE・F以外のサブタイプが得られている。Aが最も多く、B・Cのサブタイプが、これに次ぐ。つまり、A～Dに集中している。平面形は比較的整っており、Aの中には規格的のものが3点含まれている。12点のうち5点は表採、4点は第I層、2点は第II層、1点は第III層で、上部層からの出土が多い。

表札型のものは5点である。A・B・CとEの 4サブタイプが得られているが、平面形で規格的なものはなく、辛うじて上記サブタイプに分類できるようなラフなものばかりである。Cの1点を除き、他は第II・III層からの出土である。

トランプカード型の1点はBに属するものである。

撥型は20点で、全体の⅓弱である。(17) の尖基式は得られていない。(16) の撥型はA～Fの各サブタイプが得られている。その中ではA・B・Cが比較的多い。また、層位別ではII・III層に若干多いが、サブタイプのA・B・Cについてみるとほぼ半々、特に下層に多いともいえない。平面形についてみると、A・C・Dに規格的な見事なものが各1点見受けられるが、その他の外形はややラフである。

次に打製についてみると、先述したようにすべて撥型である。サブタイプのB・Fと不明の部 (18) に各1点、Cに2点含まれている。すべて第II層以下の包含層からの出土である。Cグループの2点以外は叩き石に使用され、刃が潰れている。Cグループの1点は第IV層の出土で、本遺跡最古の石斧である。両側縁は微弱な凸側縁に属するが、胴上部の両側に抉りが設けられ、一見ピーナッツ状を呈する。土掘具の可能性のあるものである。

以上、県教育委員会による資料についてみたが、狭刃型、短冊型、撥型ともほぼ同数出土しており、3類型とも主要な道具の一角を形成していたと見ることができる。

B）大田原遺跡

a）県教育委員会による調査（註6）

大田原遺跡では1980年と1982年の二回にわたって発掘調査が行われた。本稿では年度別に観察することにする。まず、1980年度の資料から見てみよう。

この調査は県教育委員会によって行われ、44個の石斧が報告されている。そのうち完形品は26点で、他は破損品である。また、叩き石に転用されたものも幾つかあるが、それらも本来は石斧であり、打製石斧も含め、観察の対象とした。採集された44点はすべて図示されている（第4表)。

本稿では打製と磨製（半磨製・局部磨製などを含む）に分けて観察する。打製は5点、磨製は39点である。まず、磨製から見ていくことにする。

註6　金武正紀・阿利直治「大田原遺跡」『石垣島県道改良工事に伴う発掘調査報告』沖縄県教育委員会、1980

第４表　大田原遺跡（県教委、1980）出土石斧の平面形態　　（　）は打製、［　］は平面形が（３）か（４）か不明のもの

タイプ／サブタイプ／層序	狭刃型											短冊型																		撥型										合計
	1	2	3	4	5	6		7	8		9	10	11	12						13						14			15	16					17			18	
						A	B		A	B	不明			A	B	C	D	E	F	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	
表採		1								2				1	1														1			1								7
Ⅰ層									1	1(1)				2	(1)	1		1			1									1	1(2)	1			(1)		1			11(5)
Ⅱ層													1																				1		1					3
Ⅲ層			[2]1		2					2	1			2						1						1					4	1	1							[2]16
計		1	[2]1		2				1	5(1)	1		1	5	1(1)	1		1		1	1					1			1	1	5(2)	3	2		1(1)		1			37 [2] (5)

［2］は平面形が（３）か（４）か不明のもの

磨製グループは狭刃型＝13点、短冊～方形型＝13点、撥型＝13点の計39点で、各類型とも同数の出土である（第４表）。

狭刃型は表示した８種のうち、（２）カモメのクチバシ形、（４）逆瓶形、（５）逆台形、（８）楕円形の４種が得られている。表中の〔　〕の２点は両側縁がほぼ平行しており、一見12Aの短冊型に類似するが、刃部の形態が異なっている。つまり、12Aは刃部が方形状を呈するのに対し、（３）や（４）のは逆台形に近い形態をとる。その点で12Aと異なっている。（３）は先端部が丸みをもつ短銃弾形で、（４）は逆瓶形を呈する。表示した〔　〕の２例は刃部が欠損し、そのため刃部が弧状を呈するのか、それとも方形に属するのか不明のため、（３）と（４）の境界線上に記載した。いずれにせよ狭刃型の部類に属し、12Aとは器形が異なるものである。

出土資料についてみると、上記（３）か（４）か不明の２点は第III層で出土し、（４）の逆瓶形や（５）の逆台形のものも第III層でのみ出土している。楕円形のうち長楕円形は上下両層で出土しているが、通常タイプのものは上層でのみ出土している。不明の１点は片方の側縁が直線的で、他の側縁は弧状の凸側縁となっており、半円形に近い変則的なものである。

次に、短冊・門札・方形グループについてみると、３タイプとも出土しているが、短冊型が最も多く（９点）、他の２種はそれぞれ２点で少ない。短冊型は上位の表土層や第Ｉ層に集中しており、下層での出土は少ない。

短冊型では両側縁が平行する真正タイプ（A）が最も多く５点で、他はそれぞれ１点の出土である。門札型は２例で、AとB形が各１点、(14) の方形タイプはAが１点出土している。層位的に見ると短冊型は第III層で２点、いずれもAグループである。また、門札型はAのサブタイプが第III層で得られ、方形のカード形も第III層でAのサブタイプが１点得られている。他はすべて第Ｉ層か表採のものである。

ここで注目されるのが、(11) の箸箱状のもので、第II層で１点出土している。いわゆる方柱状と呼ばれるものである。このタイプはこれまで後出のものと考えられていたが、報告書によると、第II層は第IIIa層の撹乱した部分となっており、同層からは貝類や獣骨などが集中的に出土したという。このような第II層の性格から、方柱状の石斧は本来、第III層（遺物包含層）に属していた可能性が高い。

表土出土の分類不能の１点（15欄）は両側縁がやや平行する弧状の刃部破片で、胴・頭部の大半を欠くが、現形から推定できる器形はサブタイプのA である。

撥型のグループも13点得られている。(16) の撥型が12点、(17) の尖基式が１点である。まず、前者から見ていくと、Bのサブタイプが最も多く５点で、次にCが３点、Dが２点、AとFがそれぞれ１点で、Eのサブタイプは得られていない。層位的に見ると、最も古い第III層ではBが４点、C・Dが各１点出土している。側縁の形態から見ると、BもDも１側縁が凸側縁をなすもので、両者ともCの特徴を共有している。つまり、Cを中心とするグループが第III

層に多いということになる。第II層ではD・Fのサブタイプがそれぞれ1点得られている。いずれも1側縁が凹側縁を形成しており、Eの変形と見ることができる。Eのサブタイプは発見されていないものの、第II層ではEを中心とするグループが2例得られたことになる。

(17) の尖基式は頭部が尖形をなすもので、サブタイプのBに属するものが1点得られている。小型の石斧で、意図的な形態というよりは製作時に偶然にできた形態と見られる。第I層からの出土である。

以上が磨製グループであるが、次に打製石斧について記述する。計5点が得られている。狭刃型の8B（長楕円）が1点、短冊型の12Bが1点、撥型の16Bが2点、16Fが1点の計5点である。いずれも第I層の出土で、第II層以下では出土していない。また、5点とも刃は潰れており、叩き石に使用された痕跡をとどめている。

以上、打製・磨製石斧の平面形態を観察したが、最も信頼のおける第III層（未撹乱）の出例についてみると、狭刃型は8点、短冊型は4点、撥型は6点となっており、狭刃型がやや優位の状況にある。また、第II層は第IIIa層の撹乱部分という報告からすると、同層出土の3点は第III層に含めることができ、これを加えると短冊型は5点、撥型は8点となって、狭刃型と撥型がほぼ同数となる。つまり、本遺跡では狭刃型は最初から重要な位置を占めていたことになる。

b）石垣市教育委員会による調査（註7）

ここに紹介する資料は石垣市が昭和55・56年度の2カ年にわたって行った調査による資料である。層序は基本的に5枚と報告されているが、石器の個々の特徴を記した観察表記載の層序との間に層位上の不一致がある。本稿では石器観察表を採用する。また、報文中の表現や数字と前記観察表との間に齟齬がある場合も同じように観察表に従うことにする。石斧は報告書によると120点採集され、そのうち73点が図示されている。小文では図示された73点について検討する。磨製は64点、打製は9点である。

まず、磨製石斧から見ていくことにする。狭刃型7点、短冊系列24点、撥型のグループ33点の計64点で、撥型が最も多く、狭刃型は全体の1割強にすぎず、１９８０年の調査に比して著しく少なく、類型間のバランスも崩れている（第5表)。

狭刃型は（2）カモメノクチバシ形1点、（4）逆瓶形2点、（7）倒卵形1点、(8B) 長楕円形2点、（9）不明1点の計7点で、（2)、（4)、（8B)、（9）の製品は層序の安定した第III層の出土であり、本遺跡の古層を代表する石斧である。いずれも平面形は端正な作りで左右バランスがとれている。8Bに分類した1点は頭部が若干尖基的な様相を呈しており、(17C) に分類することも可能だが、全体形が楕円状を呈しているため、本項に分類した。不

註7　『大田原遺跡』石垣市文化財調査報告書第四号、石垣市教育委員会、1982

第5表　大田原遺跡（1982）出土石斧の平面形態　　（　）は打製

タイプ／サブタイプ／層序	狭刃型											短冊型																		撥型										合計
	1	2	3	4	5	6		7	8		9	10	11	12						13						14			15	16						17			18	
						A	B		A	B	不明			A	B	C	D	E	F	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	
表採				1				1						3		1					1													1	1					9
Ⅰ層															1							1										2		1	1					6
Ⅱ層																															3									3
Ⅲa層					(1)																											1			1					2(1)
Ⅲb層				1							1				2					1							1				3	1	2	1						13
Ⅲ層		1								2				1(1)	3(1)	3(1)	(1)	(1)		1	1						(1)	1	3	7(1)	2	2		2	2			(1)		31(8)
計		1		2	(1)			1		2	1			4(1)	6(1)	4(1)	(1)	(1)		2	2	1					1(1)	1	3	7(1)	8	6	2	5	5			(1)		64(9)

明の１点は弧刃に属するもので、（２），（３）、（７）、（８）のいずれかの資料であろう。

短冊系列のグループには門札型（５点）やトランプカード形の方形状のもの（２点）も含まれる。分類不能のものを含めると２４点の出土である。

短冊型ではB類が最も多く６点で、AとCがそれぞれ４点の計14点、磨製はこの３タイプに限られる。第５表によると、B・Cタイプが下層の第III層で多く、Aは逆に表採で多い。平面形は左右均斉のとれた端正なものが多い。

（13）の表札型は５点であるが、A・B・Cの３サブタイプに限られる。Aの２点は下層の第III層から出土、Bの２点は表採と第III層、Cの１点はは第Ｉ層の出土である。いずれも平面形は端正である。（14）の方形グループはB・Cのサブタイプがそれぞれ１点第III層で出土し、上層では得られていない。Bの１点は左右がほぼ対照的であるが、側縁のわずかな膨らみを捉えてBに分類した。それを意識しなければ、Aに分類できる資料である。

（15）の不明欄に記入した３点のうち、１点は刃部の平面形態が方形に近い規格的な破片で、（12）、（13）、（14）のいずれかのAに分類できる資料である。あとの２点は叩石に転用されたもので、無理に分類すれば、門札型のEかFに属するものであろう。いずれも第III層からの出土である。

撥型は（16）の類型のみ出土している。この類型はすべてのサブタイプが得られ、ヴァラエティに富む。

サブタイプのAは第III層で７点出土したが、上層では得られていない。ほぼ均斉のとれた平面形を有する。Bは８点の出土で、第II層で３点、第IIIｂ層で３点、第III層で２点の計８点で、第III層に属するものが多い。平面観は左右バランスがとれている。サブタイプのCは６点で、第Ｉ層で２点、第IIIa層で１点、第IIIｂ層で１点、第III層で２点得られており、第III層での出土が多い。、比較的端正なものが多い。サブタイプのDは第IIIｂ層で２点出土している。１点は凹側縁部における内湾がやや深めで、他の１点は凹部の湾曲が緩やかである。サブタイプのEは上部で２点、下部で３点の計５点得られている。Eは両縁が凹側縁となるものであるが、典型例は１点だけで、他は緊縛を意図した結果生じた形態と見みなすことができる。サブタイプのFは５点で、上層で２点、下層で３点得られている。左右非相称のため雑に見える。

撥型については以上であるが、各サブタイプとも下層で多く得られており、撥型は下層を代表する石斧と見なすことができる。

次に打製石斧であるが、第５表のように９点報告されている。狭刃型１点、短冊グループ６点、撥型２点で、短冊グループに最も多い。

狭刃型の１点は（５）に属するもので、一見短冊型に似ているが、子細に観察すると、頭部から刃部へ向けてわずかではあるが、幅が徐々に減少しており、（５）に含めることができる。断面方形を呈しており、いわゆる柱状片刃石斧に類するものである。敲打の形跡はなく、

未製品の可能性を残す。

短冊型ではA～Eが各１点出土している。すべて第III層の出土である。そのうちサブタイプBの１点は刃が潰れ、叩石に転用した痕跡をとどめるが、他の４点はそのような痕跡は認められず、未製品の可能性も考えられる。

平面が方形状を呈するカード形（14）の１点は第III層の出土で、全体的に丸く仕上げられ、楕円形に近い。一面は自然面を多く残し、他面は打剝調整を行っている。サブタイプのBに属する資料である。

撥型の１点はサブタイプのAに属するもので、第III層の出土である。頭部より刃部がやや幅広く整形された平面形を有し、刃部は潰れている。叩石に転用されたものである。撥型のうち尖基式（17）の１点はサブタイプのCに分類したが、叩石に転用したため、上下両端とも刃縁は潰れて弧状を呈し、現状はほぼ楕円形を呈している。しかし、転用前の尖基部は尖基的形状を有していたと考えられることから、現状を無視してサブタイプのCに分類した。

C）仲間第二貝塚（註４）

本貝塚は昭和34年８月、早稲田大学八重山調査団によって試掘調査が行われた。その結果、層序は第Ｉ層＝表土（耕土）、第II層＝暗褐色土層（その中に部分的に混土貝層が介在）、第III層＝褐色土層の３枚である。混貝土層からは土器片少量と敲石が発見されただけという。石斧は11点報告されているが、すべて表面採集品である。したがって、１級品とは言い難いが、参考資料として掲げたい。平面形を第６表に示した。

狭刃型１点、短冊～方形グループ５点、撥型５点の計11点である。狭刃型が少ないのは表面採集という資料の性格によるものかもしれない。狭刃型は刃部への幅が徐々に狭くなる逆台形のもので、刃部は直刃である。第２グループの短冊～方形型は短冊型のCが１点、門札型はBが２点、Cが１点の計３点で、方形タイプはなく、不明の１点は刃部の破片で、刃縁は弧状を呈し、胴部へ幅が拡大する傾向が見られる。現状から推定される器形は（12）か（13）のCである。

採集量が最も多いのは撥型（５点）で、その中ではEを中心とするサブタイプが４点と最も多い。あとの１点は全面磨製の規格的なサブタイプのAである。撥型に次ぐのは門札型で３点採集され、いずれも凸側縁と関係するB・Cのサブタイプである。 先述の不明欄（15）の１点もタイプ（12）か（13）のサブタイプCが類推され、Cと関係する資料が多く採集されている。

上記11点の表採品につてみると、狭刃型が極端に少なく、短冊ないしはその系統のものと撥型が主体をなしている。

第6表　仲間第二貝塚・平地原遺跡（1979，1980）・フーネ遺跡出土石斧の平面形態　　（　）は打製石斧

タイプ／サブタイプ／遺跡	狭刃型											短冊型																			撥型										合計
	1	2	3	4	5	6		7	8		9	10	11	12						13						14			15	16						17			18	
						A	B		A	B	不明			A	B	C	D	E	F	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	
仲間第二					1											1					2	1							1	1			1	2	1					11
平地原1979					2								1	1			1		1														3							9
平地原1980	2	1		1	1		1			2	1			1		1(1)	1	1	1							1				2	2(1)	1	1		1		1	2		25(2)
フーネ		1											1							1																				3

D）平地原遺跡

本遺跡では昭和53年に試掘調査が行われ、その成果は1979年と1980年の２回にわたって報告が行われている。

1）1979年度の報告（註８）

昭和53年における試掘調査の結果、第Ⅰ層＝茶黒色土層、第Ⅱ層＝茶褐色土層、第Ⅲ層＝地山の３層が認められ、表土から地山までの厚さは35～40センチメートルであった。多量の石器のほか厚手の赤色土器も少量検出された。石器は石斧、敲石、磨石などで、その中では石斧が最も多く、数10点出土したという。略報のため、層序別の出土状況は記されていない。石斧は小型扁平の局部磨製が石斧のほぼ90パーを占めているという。石斧は大部分が耨耕用と推定されている。

報告書には石斧が９点図示されている。狭刃型が２点、短冊グループが４点、撥型が３点の計９点である（第６表）。

狭刃型の２点は（５）の逆台形に属するもので、短冊型に近い形態を有し、頭部より刃部の幅がわずかに小さい。その中の１点の頭部側縁はL字状に削られている。

本遺跡では横断面が方形に近い、いわゆる方柱状石斧の胴～刃部破片が１点表採されている（第６表11）。表採品ながら貴重な資料である。短冊型は３点で、１点はサブタイプAに属する胴刃部破片だが、製作は雑である。他の１点はDの資料で、片方の側縁は緩やかな凸側縁だが、他方は凹凸の混ざった雑な側縁である。あとの１点はFのサブタイプに属するもので、片方は凹側縁、他方は直線的な側縁である。本標品と前記のサブタイプDの刃部は若干狭刃状を呈するが、器形全体から見ると短冊型に分類できるものである。門札型やカード形は得られていない。

撥型の３点はいずれもサブタイプのDに分類できるもので、片方の側縁は凸側縁、他方は凹側縁となって、やや均斉を欠く。尖基式は得られていない。

以上、図示された９点について観察したが、狭刃型、短冊型、撥型がほぼバランスよく採集されている。

2）1980年度の報告（註９）

報告書によると、昭和53（1978）年の調査で石斧が28点得られている。試掘調査は行われておらず、耕耘機が入った直後の畑地から土器片とともに表採されたもので、採集石斧は局部磨製25点、打製２点、未製品１点となっている。未製品の１点は図のキャプションによる

註８　沖縄県文化財調査報告書第22集　『石垣島の遺跡』　沖縄県教育委員会、1979
註９　金武正紀・阿利直治「平地原遺跡表面採集遺物」『石垣島県道改良工事に伴う発掘調査報告』沖縄県教育委員会、1980

と半磨製石斧である。28点のうち報告書には27点図示されており、本稿では図示された27点についてみていくことにする。

まず、磨製の25点にいて見ると、狭刃型は９点、短冊グループは６点、撥型は10点である(第６表)。

狭刃型は（３）・（７）以外のサブタイプが採集され、ヴァリエーションに富む。楔形が２点、そのうちの１点は頭部が尖り気味で、やや柳葉的である。（２）のカモメノクチバシ形の１点は全体的に丸みを帯び、辛うじて本項に分類できるような雑なものである。（４）の逆瓶形の１点も両側縁は完全に平行になりきっておらず、雑である。（５）の逆台形の１点は頭部の片方の側縁がL字状に欠け、肩を形成する。（６B）の鉋形の１点は頭部と刃部が若干丸みを帯び、（７）に近似した外形をもつ。しかし、下田原貝塚のものに比べると精度の点で劣る。（８B）の長楕円形は２点で、両者とも長めで、楕円形と言うよりは柳葉形に近い。（９）の不明の１点は頭部を欠く胴下半部の破片で、胴下半部で一旦膨らみ、そして刃部へ幅をわずかに減ずるタイプである。

短冊グループは短冊型が５点、方形のトランプカード型が１点の計６点である。(12) のAに属する刃部破片が１点、両側縁が凸側縁となるサブタイプCが１点で、後者は頭部近くの両側縁に緊縛用の浅い抉りが設けられ、ヒョウタン形の概形を有する。あとはD・E・Fがそれぞれ１点採集されているが、Eも頭部近くに緊縛用の浅い抉りが両側縁に設けられている。(14) のトランプカード型の１点はやや方形に近く、サブタイプのAに分類できるものである。

撥型は10点採集され、最も多い。E以外のサブタイプが採集されている。サブタイプのAは２点で、やや均斉のとれた平面形を有する。サブタイプのBも２点で、片方の側縁は直線的、他方は凸側縁となるグループだが、全体的器形はAに近い。サブタイプCは比較的端正な作りのものが得られているが、頭部左右の器形が若干バランスを欠く。サブタイプDの１点は側縁の凹部が浅く、一見、Aに見える。Fの１点も側縁の凹部が浅く、Aに近い概形を有する。

(17) の尖基式は３点で、Aはなく、Bが１点、Cが２点である。サブタイプBの１点は胴上半部が頭部へ向かってすぼまるタイプだが、両側縁の斜度は異なっていてアンバランスである。サブタイプCは頭部ですぼまる尖基式である。１点は完形品で典型的なタイプに属するが、他の１点は頭部上端が欠損し、尖基式というよりは一見、雑な有段に見える。

以上、25点について概観した。３類型の中では短冊グループが若干少ないが、一応、各類型ともそれなりに得られており、大田原遺跡や下田原遺跡に近い比率といえる。

打製は２点である。１点は短冊型のサブタイプCに属するもので、左右バランスのとれた凸側縁である。上下両端とも多少丸くなっており、楕円形に近い平面形を有する。他の１点は撥型のサブタイプBに属するもので、片方の側縁は直線的、他方は凸側縁だが、全体的器形はAに近い。打製と報告されたのは以上の２点で、いずれも比較的入念に整形されている。

E）フーネ遺跡（註10）

本遺跡はフーネ第１遺跡（旧称フーネ遺跡）とフーネ第２遺跡（旧称フーネ貝塚）からなる。1977年１月16日、両遺跡の数地点で試掘調査が実施され、その結果、フーネ第１遺跡は厚手土器を伴う下田原式時代の遺跡、フーネ第２遺跡は無土器時代の遺跡と確認された。

第１遺跡からは厚手土器（報告者による赤色土器）と小型刃部磨製石斧や敲石などが検出された。また、石製尖頭器が表採され、山原貝塚の骨製尖頭器に酷似するとして注目されている。第２遺跡からは小型両刃石斧が若干検出されたが、土器は検出されていないという。

ところで、第６表に記載した３点の石斧は報告書の巻頭部分に図示されたもので、「フーネ遺跡出」と記載されているが、第1か第2遺跡かについてはふれていない。1点は（２）の狭刃型石斧、他の1点はいわゆる柱状片刃石斧、あとの1点は門札型の端正な両刃石斧である。

狭刃型の１点は粗雑な平面形をもつが、何とか（２）のカモメノクチバシ形に分類できるもので、両側縁はそれぞれ凹凸の両形態よりなる。側縁の形態は短冊型や撥型の分類で見ると、サブタイプのDに属するもので、頭部を欠くが、残存部の形状は前述のように（２）のサブタイプに分類できる。

方柱状のものは身の上半部を欠く刃部破片で、断面図からみると両側縁は垂直状を呈し、側面はやや丁寧に加工したように見受けられる。

最後の１点は門札型の完形品で、規格的な平面形を有し、横断面は扁楕円形で全体的に形の整った石斧である。

さて、上記３例の出土地点だが、報告書によるとフーネ第１地点の石斧は「一般的に小形で扁平、刃部磨研石斧」とあり、フーネ第２遺跡でも「混礫砂層（後述）から小形両刃石斧が検出された」とあって、前述の狭刃型石斧と門札型石斧が、いずれの遺跡で出土したか特定できないが、方柱状の石斧については報告書に試掘１地点の「第３層（混礫砂層の遺物包含層）から小形の断面四方形両刃石斧が検出された」とあって、図示された方柱状の石斧はフーネ第２遺跡出土の可能性が高い（註10）。つまり、無土器時代の石斧ということになる。

なお、本遺跡では他の遺跡で一般的な撥型が報告されていない。このことは採集量が少なかったことに基因していると思われる。

III）　小　結

以上、５遺跡で出土ないしは表採された石斧の平面形について概観した。各遺跡における主要タイプ（狭刃型・短冊形・撥型）の出土頻度には多少のばらつきが見られる。このようなばらつきは前項で見たように、出土量の少ない遺跡で特に顕著である。しかし、出土量の

註10　新田重清「フーネ遺跡群」『石垣島の遺跡』　沖縄県教育委員会、1979

多い遺跡では、偏りは少ない。再度、出土量の多い下田原、大田原両遺跡について出土頻度を見てみよう。

下田原貝塚では前項で見たように昭和29年以来、3回の発掘あるいは試掘調査が行われている。この3回の調査の中で、出土量が最も多かったのは県教育委員会による調査である。161点得られ、そのうち64点が図示されている。叩石に転用されたものを含めると67点である。打製石斧を除いた62点についてみると、狭刃型23点、短冊型19点、撥型20点で、狭刃型が若干多いものの、ほぼ同数とみていい（第3表)。打製の5点はすべて撥型である。

次に、大田原遺跡の1980年度の報告書を見てみると、打製を含め44点出土している。打製の5点を除いた39点についてみると、狭刃形13点、短冊型13点、撥型13点で、3タイプとも同数の出土となっている（第4表)。打製は狭刃型1点、短冊型1点、撥型3点の計5点である。次に同遺跡の1982年度の報告書を見てみると120点出土し、打製石斧9点を含め、73点が図示されている。打製石斧を除いた64点についてみると狭刃型7点、短冊型24点、撥型33点で、短冊型と撥型は10点の差はあるものの本遺跡の主体を成している（第5表)。狭刃型は7点と極端に少ない。しかし、前項の1980年度の報告では3類型とも同数の出土であり、本遺跡でも狭刃型は主要な利器の1種であったと見ていいだろう。

以上から分かるように、下田原貝塚や大田原遺跡などの主要遺跡における3類型の石斧（狭刃型・短冊型・撥型）は出土量において若干の差はあるものの、それぞれ当時における利器の主要な一角をなしていたと見ることができる。

次に狭刃型についてみると、楔形は下田原貝塚に多いが、大田原遺跡では報告がなく、平地原遺跡では2点表採されている。最も多いのは逆台形（5）で16点、次いで楕円形の13点、カモメノクチバシ形10点、楔形8点、鉋刃形7点、逆瓶型の6点の順で、狭刃型の中ではこの6種が比較的多い。これらのサブタイプがどのような機能を目的に製作されたか、今後の吟味が必要である。

ここで注目すべきものが短冊型の系列に含めた箸箱形（11）の、いわゆる方柱状の石斧である。発掘では大田原遺跡の第II層で1点得られている。また、表採品としては平地原遺跡やフーネ遺跡でも得られている。ただフーネ遺跡の場合、報告書の記述から隣接する無土器時代のフーネ第2遺跡に由来する可能性が高いが、大田原・平地原例からすると、発見例は少ないものの有土器時代でもすでに使用していたとみていいだろう。

短冊グループには上記（11）のほか、短冊型・門札型・トランプカード型の3タイプも含まれる。三者とも下田原貝塚や大田原遺跡で出土している。短冊型が最も多く、トランプカード型が最も少ない。(12）の短冊型は今回6つのサブタイプに細分した。その中ではA・B・Cのサブタイプが相対的に多い。また、(13）の門札型も6つのサブタイプに細分してみたが、そこでもA・B・Cのサブタイプに集中する傾向が見られた。(14）のトランプカード型には3つのサブタイプを設けたが、出土量は全体的に稀少で、現状では踏み込んでコメントでき

る段階にない。

(16) の撥型も今回、各遺跡の実態に即して6つのサブタイプに細分した。どの遺跡でもA・B・Cのサブタイプに集中する傾向が見られる。(17) の尖基式は前回と同じように3つのサブタイプに分類した。しかし出土量が少なく、今のところ、よく様子がつかめない。尖基式は下田原貝塚における県教育委員会や國分資料のうち層位資料には見あたらないが、早稲田資料には整形の見事な発掘品があり、大田原遺跡にも発掘資料があって、この時代にこの種の尖基式石斧が存在したことは間違いない。

今回、各類型及びサブタイプについて層位表を作成し（表1～6）、層位的見地から推移の有無を検討してみたが、出土資料が少なく、有効な結果は得られなかった。しかし、今後、資料が増加すれば、何か手がかりが得られるかもしれない。

また、今回は短冊形・門札型・撥型をそれぞれ6つのサブタイプに細分し、層位上の推移を検討してみたが（表1～6）、ここでも資料上の制約があって、予期したような成果は得られなかった。今後の資料に期待したい。

なお、狭刃型のうち従来短銃弾形に一括していた逆瓶型を、今回分離して独立の項目を新設した。ところが、短銃弾形は前項で見たように有土器時代の遺跡では出土していない。前回報告（註2）した無土器時代の遺跡では仲間第1貝塚・崎枝赤崎貝塚・トゥグル浜貝塚などの3遺跡で出土したことになっているが、いずれの遺跡でも逆瓶形が主体である。トゥグル浜の1点も両側縁がほぼ平行し、刃部が舌状の平面形を有するということから短銃弾形に含めたが（第1図3）、見方によってはカモメノクチバシ形やカプセル状に含めることも可能である。典型的な短銃弾形は今のところ見受けられないので、以後、この項目（短銃弾形）は廃止し、表から削除したい。

第2節　断面形態

さて、次に断面形態であるが、前回（註2）のものを基本に、今回はサブタイプを若干追加した。基本形は厚型と横長（扁平）の2タイプであるが、後者の横長型は中厚手と扁平に細分できる。今回、横長グループの中厚手と扁平の欄にそれぞれ新たに2種追加した。厚型グループに増減はなく、前回と同じである。結果として、サブタイプは前回の12から16に増加した。新設のサブタイプは断面が三角形を呈するものと断面が凸レンズ状に中央部が厚く、両端がやや尖り気味に薄くなる形態の2種で、この種の断面をもつものが中厚手と扁平グループに認められる。念のため、各類型及びサブタイプについて簡記すると、次のようになる。分類の基本は前回（註2）と同じである。

厚手のグループは厚／幅の比率が1：1.6以内のもので、断面が、①正三角形あるいはそれに類するもの、②断面が方形またはそれに類するもの、③円形、④半円形あるいはそれに類

するもの、⑤台形あるいは類台形、⑥不定形のものの６種に細分できる。

横長（扁平）グループのうち中厚手に属するものは先述のように２つのサブタイプを追加し、計５つのサブタイプとなる。中厚手のグループは厚／幅比率が１：1.8～2.7センチメートル以内にくるもので、幅が厚さの約1.8～2.7倍くらいのものということになる。若干重量感のある石斧である。断面形態は①三角形または類三角形のもの、②凸レンズ状のもの、または近似のもの、③断面が楕円またはそれに類するもの、④断面が長方形またはこれに類するもの、⑤不定形のもの、以上の５種類である。

扁平グループは厚／幅比率が１：2.8以上のもので、幅が2.8倍になると視覚的には横長（扁平）のイメージが形成される。断面形態は、①三角形あるいは類三角形のもの、②凸レンズ状あるいは近似のもの、③扁楕円形あるいはそれに類するもの、④長方形あるいは類長方形、⑤断面が不規則のもの、以上の５種類である。

次に各遺跡の出土例を見ていくことにする。

A）下田原貝塚

1）沖縄県教育委員会による資料（註５）

62点の磨製石斧と５点の打製石斧が報告されている。磨製石斧から見ていくことにする。厚型13点、中厚手36点、扁平13点で、中厚手が最も多い（第７表）。

第７表　下田原貝塚（県教委）出土石斧の断面形態　　（　）は打製石斧

形態／層序	厚型						横長 中厚手						横長 扁平						不明	合計
	△	□	○	⌓	⌓	⌓	△	⬭	⬭	□	⬭	不	△	⬭	⬭	⬭	⬭	不		
表採	4	1	2			1	1		10	1				1	1					22
Ⅰ層									3	1	2				2		1			9
Ⅱ層				1		1(1)		1	2	6(1)	1			(1)	2		3			17(3)
Ⅲ層	2	(1)		1			1	1	5	1					2		1			14(1)
Ⅳ層											(1)									(1)
計	6	1(1)	2	2		2(1)	2	2	20	9(1)	3(1)			1(1)	7		5			62(5)

厚型は断面台形以外のサブタイプが得られている。大半は表採品であるが、第Ⅱ・Ⅲ層から三角形・半円形・不定形のもが計５点出土しており、古いタイプといえる。円形の２点は表採品である。

中厚手の36点は表採と第Ⅰ層から18点、第Ⅱ・Ⅲ層から18点、ほぼ同数の出土となっている。第Ⅱ・Ⅲ層から各サブタイプが出土しているが、三角形のものは第Ⅱ層では出土がなく、第Ⅲ層でのみ出土している。

扁平グループは13点のうち５点は表採ないしは第Ｉ層からの出土で、他の８点は第II・III層からの出土である。ほとんどは扁楕円形と不定形のもだが、凸レンズ状のものも１点表採されている。

打製石斧は叩き石に転用されたものを含め５点出土している。表の（　）に示す５点で、すべて撥型に属し、第II層で厚型の不定形１点、中厚手の矩形１点、扁平の凸レンズ状１点の計３点、第III層で厚型の方形のものが１点、そして第IV層からは中厚手の不定形のものが１点が得られ、打製は厚手と中厚手が目立つ。

以上に記したような出土状況から、磨製・打製とも層位上の変化をおさえることはできなかった。

２）國分資料（註３）

出土資料の11点は磨製石斧で、表土（第Ｉ層）から２点、第II層から２点、第III層から７点である（第８表）。それらを類型別に見てみると、厚型１点、中厚手６点、扁平４点となる。厚型の１点は円形のもので、第III層からの出土である。中厚手のうち凸レンズ状・楕円形・不定形のものが第III層からそれぞれ１点出土、第II層からは楕円形のものが１点得られている。第Ｉ層からは三角形と不定形のものが各１点出土している。扁平タイプは第III層から扁楕円形のもの２点と不定形のもの１点、また、第II層からは不定形のものが１点出土している。國分資料も中厚手が多い。

以上のような状況であるが、全体的に層位資料が少なく、層位上の変化を読みとることはできなかった。

第８表　下田原貝塚（國分資料）出土石斧の断面形態　　（　）は打製石斧

形態 / 層序	厚型						横長 中厚手						横長 扁平						不明	合計
	△	□	○	⌓	⏢	⬭	△	⬭	⬭	□	⬭	不	△	⬭	⬭	⬭	⬭	不		
Ｉ　層							1				1									2
II　層									1									1		2
III　層			1					1	1		1				2			1		7
計			1				1	1	2		2				2			2		11

３）早稲田資料（註４）

試掘調査によって、８点の磨製石斧が得られている（第９表）。厚型はなく、中厚手が７点、扁平タイプが１点の計８点である。第Ｉ層から中厚手の楕円形１点、扁平の楕円形１点が出土し、他の６点はすべて第II層からの出土である。後者は中厚手だけで、凸レンズ状１点・扁楕円１点・不定形４点で、断面三角形や矩形は得られていない。

以上、下田原貝塚における３調査の成果を概観したが、層位資料はあっても出土量が少なく、変遷がたどれる状況にない。しかし、３類型のうち中厚手が主体であることを知ることができた。他はそれぞれ1/5前後の出土である。

上記３資料を合算した比率は厚型＝17%、中厚手＝61%，扁平＝22%である。

第９表　下田原貝塚（早大資料）出土石斧の断面形態　　（　）は打製石斧

形態 / 層序	厚型						横長 中厚手						横長 扁平						不明	合計
	△	□	○	⌓	⏢	⬭	△	⬭	▭	□	⬭	不	△	⬭	⬭	▭	⬭	不		
Ⅰ　層									1						1					2
Ⅱ　層								1	1		4									6
計								1	2		4				1					8

B）大田原遺跡

1）1980年度の報告（註６）

磨製石斧が39点、打製石斧が５点得られている（第10表）。磨製石斧から見ていくと、厚型６点、中厚手18点、扁平15点の出土である。

厚型の６点は三角形が３点、方形が２点、円形が１点で、他のサブタイプは出土していない。出土した３サブタイプは第Ⅲ層で各１点出土しており、方形のものは第Ⅱ層でも１点出土している。また、第Ⅰ層からは三角形のものが２点出土してる。〔　〕は平面形がピストル弾状か逆瓶型か判別不能のもので、刃部が欠けているために分類ができないが、断面形は類四角形と不定形の扁平のものが第Ⅲ層から各１点出土している。

第10表　大田原貝塚（県教委、1980）出土石斧の断面形態　　（　）は打製石斧

形態 / 層序	厚型						横長 中厚手						横長 扁平						不明	合計
	△	□	○	⌓	⏢	⬭	△	⬭	▭	□	⬭	不	△	⬭	⬭	▭	⬭	不		
表　採							1				1				4		1			7
Ⅰ　層	2						1(1)		2(2)		2(1)				2		2(1)			11(5)
Ⅱ　層		1					1				1									3
Ⅲ　層	1	[1]	1				1	1	6		1					1	4[1]			16[2]
計	3	1[1]	1				4(1)	1	8(2)		5(1)				6	1	7(1)[1]			37[2](5)

※（　）は打製、［　］は磨製だが、平面形が（３）か（４）か不明のもの

中厚手の18点は表採と第Ⅰ層で７点、第Ⅱ・Ⅲ層から11点出土し、断面が矩形を呈するもの以外はすべて得られている。第Ⅲ層が最も多く、三角形１点、凸レンズ状１点、楕円形６

点、不定形１点で、第II層からは三角形１点、不定形１点、他は第Ｉ層及び表採資料となっている。中厚手では楕円形が最も多く、第III層で６点も出土している。

扁平グループは三角形と凸レンズ状以外のものが得られている。第III層では長方形１点と不定形４点、第II層からの出土はなく、他は第Ｉ層及び表採となっている。

打製石斧は（　）に示す５点で、そのうち４点は中厚手、他の１点は扁平のものである。中厚手のものは４点とも第Ｉ層からの出土で、三角形１点・楕円形２点・不定形２点、扁平のものは不定形のものが第Ｉ層から１点出土している。

各類型間の比率は厚型＝14%，中厚手＝50%，扁平＝36%である。

２）1982年度の報告（註７）

磨製石斧64点、打製石斧９点が報告されている（第11表）。まず、磨製石斧64点について見ると、厚型３点・中厚手36点・扁平25点で、厚型が極端に少ない。

厚型は三角形・方形・円形の３サブタイプに限られ、他の資料は得られていない。第III層で三角形・方形が各１点、第II層では円形が１点検出されている。

中厚手は表採で７点、第Ｉ層から１点、第II層２点、IIIa層２点、IIIｂ層５点、III層19点の36点で、大半（26点）は第III各層からの出土である。

第11表　大田原遺跡（石垣市教委、1982）出土石斧の断面形態　　（　）は打製石斧

形態 / 層序	厚型						横長 中厚手						横長 扁平						不明	合計
	△	□	○	⌓	⌓	⌓	△	⬭	⬭	□	⌓	不	△	⬭	⬭	⬭	⬭	不		
表採								2	3	1	1			1			1			9
Ｉ層							1						1		1	1	2			6
II層			1				1			1										3
IIIａ層		(1)							1		1									2(1)
IIIｂ層							3	1		1				3	1	1	3			13
III層	1	1					3(4)	2	9	1(1)	4(1)		1	1	3		5(2)			31(8)
計	1	1(1)	1				8(4)	5	13	4(1)	6(1)		2	5	5	2	11(2)			64(9)

第III層では三角形３点、凸レンズ状２点、楕円形９点、矩形１点、不定形４点が出土し、第IIIｂ層からは三角形３点、凸レンズ状１点、矩形１点、第IIIa層からは楕円形１点、不定形１点、第II層からは三角形１点、矩形１点が出土している。

扁平型は第II・IIIa層での出土はなく、上層（表採・第Ｉ層）と下層（第IIIb・III層）で出土しているが、上層７点、下層18点と下層に多い。

第III層では矩形以外のサブタイプ、つまり三角形１点、凸レンズ状１点、扁楕円３点、不

定形５点、第Ⅲｂ層では、凸レンズ状３点、扁楕円形１点、矩形１点、不定形３点で、三角形以外のサブタイプが出土している。そして各サブタイプとも出土量は少ないものの、第Ⅰ層や表採などでも得られており、持続していることが分かる。

打製石斧は（　）に示す９点で、第Ⅲ層で８点、第Ⅲa層で１点の計９点である。第Ⅲa層の１点は厚型の方形に属するものである。中厚手は６点で、すべて第Ⅲ層の出土で、三角形４点・矩形１点・不定形１点、扁平のものは不定形のものが２点、第Ⅲ層で得られている。

以上、1980年度と1982年度の資料をチェックしてみたが、各類型間の層位上の推移をおさえることはできなかった。

現時点でいえることは、厚型・中厚手・扁平３類型のうち、中厚手が主流で、扁平がこれに次ぎ、厚型は極端に少ないということである。本遺跡の厚型は三角形・方形・円形に限られ、他のサブタイプは出土していない。中厚手や扁平のものは、層位的に多少ばらつきはあるが、一応、全サブタイプが得られている。

各類型間の比率は厚型＝５％，中厚手＝56％，扁平＝39％である。

Ｃ）仲間第二貝塚（註４）

発掘資料はなく、すべて表採資料である。磨製石斧が11点報告されている。厚型はなく、中厚手６点、扁平が５点で、ほぼ同数の採集である（第12表）。

中厚手は三角形１点、凸レンズ状１点、不定形４点、扁平は長方形が１点、不定形が４点である。

以上の資料から本遺跡の石斧の特徴を抽出するには資料が少なすぎるが、断面形態についていえば中厚手がやや優位にあるといえる。

第12表　平地原遺跡(1979, 1980)・フーネ遺跡・仲間第二貝塚出土石斧の断面形態　（　）は打製石斧

形態	厚型						横長												不明	合計
							中厚手						扁平							
遺跡	△	□	○	⌓	⌓	⌓	△	⬭	⬭	□	⬭	不	△	⬭	⬭	⬭	⬭	不		
平地原(1979)		1					3		2	1	2									9
平地原(1980)	2					1	1	2	6		1(1)		3	1	4		3(1)			24(2)
フーネ遺跡		1													1		1			3
仲間第二貝塚							1	1			4					1	4			11
計	2	2				1	5	3	8	1	7(1)		3	1	5	1	8(1)			47(2)

D）平地原遺跡

1）1979年度の報告（註８）

９点の磨製石斧が紹介されている（第12表）。厚型１点、中厚手８点で、扁平タイプは報告されていない。

厚型は方形のものが１点、中厚手は三角形が３点、楕円形が２点、矩形が１点、不定形が２点である。扁平タイプが報告されていないのは採集資料が少ないせいであろう。

2）1980年度の報告（註９）

24点の磨製石斧と２点の打製石斧が紹介されている。すべて表採品である。

磨製石斧は厚型３点、中厚手10点、扁平11点である（第12表）。厚型は三角形が２点、不定形が１点、中厚手は三角形１点・凸レンズ状２点・楕円形６点・不定形１点。扁平は三角形３点・凸レンズ状１点・扁楕円形４点・不定形３点で、中厚手と扁平には採集されていないサブタイプもあるにはあるが、一応バランスよく出土している。その中では三角形のサブタイプが比較的目立つ。なお、厚型が少ないのは採集資料が少ないせいであう。

打製石斧は（　）に示す２点で、中厚手と扁平が各１点表採されており、いずれも不定形に属するものである。

E）フーネ遺跡　（註10）

３点の磨製石斧が図示されている（第12表）。厚型１点、中厚手はなく、扁平のものが２点である。厚型の１点はいわゆる方柱状の断面をもつもので、この１点は先述のように、無土器時代に由来する可能性が高い。他の２点は扁楕円形１点、扁平の不定形１点の計２点で、出土状況が明確でなく、有土器時代のものか、それとも無土器時代のものか、現時点では特定ができない。

小　　結

以上、各遺跡で出土した石斧の断面形態についてみてきた。断面型態は基本的には厚手のタイプと扁平のタイプに大別できるが、後者には厚型に近い中厚手のものもあり、今回も引き続き厚型・中厚手・扁平の３類に分類して観察した。断面形態が時間の推移とともにどのように変化していったか、各遺跡について層位表を作成し検討してみたが（表７～12)、今のところ資料が少なく、その上、層位上のばらつきもあり、手がかりが得られない。将来の良好な層位資料を待つほかない。

ところで、断面形態の主要な３類型についてみると、中厚手に中心があり、扁平がこれに次ぎ、厚型が最も少ない。上記５遺跡のものを総合的に見てみると（ただし、國分による下

第13表　有土器時代石斧の遺跡別断面形態

形態 / 遺跡	厚型						横長 中厚手						横長 扁平						不明	合計
	△	□	○	⌒	⌓	⌔	△	⬭	⬭	□	⌒	不	△	⬭	⬭	⬭	⬭	不		
下田原（國分）			1				1	1	2		2				2				2	11
下田原（早大）								1	2		4				1					8
下田原（県教委）	6	1(1)	2	2		2	2	2	20	9(1)	3(2)			1(1)	7		5			62(5)
大田原遺跡(1980)	3	1[1]	1				4(1)	1	8(2)		5(1)				6	1	7[1](1)			37[2](5)
大田原遺跡(1982)	1	1(1)	1				8(4)	5	13	4(1)	6(1)		2	5	5	2	11(2)			64(9)
平地原遺跡(1979)		1					3		2	1	2									9
平地原遺跡(1980)	2					1	1	2	6		1(1)		3	1	4		4(1)			25(2)
仲間第二貝塚							1	1			4					1	4			11
フーネ遺跡		1													1		1			3
小計	12	5[1](2)	5	2		3	20(5)	13	53(2)	14(2)	27(5)		5	7(1)	26	4	32[1](1)		2	230[2](21)
下田原(國分・表採)	2		1		2		7	8	9		2	1	1	9	5		6			53
総計	14	5[1](2)	6	2	2	3	27(5)	21	62(2)	14(2)	29(5)	1	6	16(1)	31	4	38(4)		2	283[2](21)

※（　）は打製石斧、［　］は磨製だが、平面形が（3）か（4）か不明のもの

田原貝塚の表採資料53点は大泊浜貝塚の資料を含む可能性があり、ここでは時代不詳のフーネ遺跡（３点）とともに除外する)、厚型は27点で約12%、中厚手は127点で55%、扁平タイプは75点で33%となり（第13表)、最も需要の高かったのは中厚手のタイプということになる。この意味づけは今後の課題である。

また、各類型間における出現比率を見てみると、厚型の中では断面三角形のものが最も多く、中厚手では楕円形が他を圧しており、不定形のものや断面三角形のものがこれに続く。また、扁平グループでは不定形のものが最も多く、扁楕円形がこれに次ぐ。

第３節　平面形態と断面形態の相関関係

さて、これまで平面形と断面形を別個に見てきたが、両者はどのような関係にあるだろうか。前回は原稿締切のタイムリミットに間に合わせることができず、報告できなかった項目である。層位資料については層位別に相関表を作成し観察した（別表１～16)。まず、層位資料から見ていくことにする。

Ｉ）各遺跡における出土例

Ａ）下田原貝塚

１）県教育委員会による調査（註５）

磨製石斧62点、打製石斧５点が報告されている。まず、磨製石斧から見ていくことにする。

狭刃型の断面形態は第14表に見られるように厚型が９点、中厚手11点、扁平３点の計23点で、中厚手が最も多く、次に厚型、そして扁平が最も少ない。中厚手は各サブタイプに平均的に見られるが、厚型は（１）～（５）に偏り、（６）～（８）には見られない。後者は平面形と関係する結果であろう。扁平タイプも３例のうち１例は楔形に属しているが、他の２例は鉋刃形（６）に属しており、これも平面形と関わる断面形態であろう。つまり、狭刃型は中厚手以上の厚さを有する傾向にあるが、鉋刃形（６）～楕円形（８）のような平面形がやや幅のある場合は、断面が扁平になる傾向を示しているように思われる。

狭刃型は先述のように倒卵形以外は全タイプが出土している。下層から見ていくと、第III層では厚型が２点、中厚手が２点、扁平は出土していない（別表４)。第II層では厚型１点、中厚手５点、扁平３点と、初めて扁平が見られる（別表３)。第Ｉ層では中厚手だけが３点出土している（別表２)。表採品は厚型が６点、中厚手が１点、扁平は採集されていない（別表１)。以上を要約すると、厚型と中厚手は第III層で各１点得られ、扁平のものは第II層で３点出土しているが、それが前後関係を示すものかどうか、現時点では確言できない。

短冊グループは（10）～（14）の５種に大別される（第14表)。(10）のカプセル形は１例

第14表　下田原貝塚出土石斧の平面・断面形態の統計（県教委）　　（　）は打製

断面形態 ＼ タイプ		狭刃型											短冊型																	撥型										合計
		1	2	3	4	5	6		7	8		9	10	11	12						13						14			15	16						17			18	
	サブタイプ						A	B		A	B	不明			A	B	C	D	E	F	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	
厚型	△	2	3																			1																		6
	□														1																								(1)	1(1)
	○				1																										1									2
	⌓					1																											1							2
	⌓																																							
	⌓	1	1																																(1)					2(1)
横 中厚手	△																														1	1								2
	⬭																								1					1										2
	⬭		1		1	1	1	2		1			1			2	1	1					1							2	3	2								20
	□		1				1				1				2	1					1									1	(1)	1								9(1)
	⬭	1													1			1														(1)								3(1)
	不																																							
長 扁平	△																																							
	⬭																											1				(1)								1(1)
	⬭							2									2															1	1		1					7
	▭																																							
	⬭	1																				1									1		1	1						5
	不																																							
不明																																								
合計		5	6		2	2	2	4		1	1		1		4	3	3	2			1	2	1		1			1			4	6(1)	5(2)	3	1	1(1)				(1)	62(5)

で、中厚手のものである。(12) の短冊形は厚型が１点、中厚手が９点、扁平が２点と、このグループでは厚型が激減し、逆に中厚手が他を凌いでいる。このことも平面形と関係する現象であろう。厚型の１点は断面が方形を呈するものである。

層位的に見ると、短冊型は第III層で中厚手１点のみ（別表４)、第II層でも中厚手のみ２点(別表３)、第Ｉ層では中厚手２点、扁平２点（別表２）と、扁平はこの層で出土する。表面採集では中厚手４点、厚型が１点得られている（別表１)。つまり、厚型と扁平は安定した層からの出土ではなく、このことが後出の形態を意味するのかどうか、現時点では不明。

表札型（表番号13）は厚型１点・中厚手３点・扁平１点の計５点である（第14表)。層位的に見ると、第III層で厚型１点・中厚手２点（別表４)、第II層で扁平１点（別表３)、第Ｉ層では出土がなく（別表２)、表採で中厚手が１点得られている（別表１)。厚型の１点は断面が三角形を成すものである。

トランプカード形（14）は表採の１点だけで、サブタイプのBに属し（第14表)、長さ4.7cm,幅2.8cm、厚さ８mm の小型の片刃石斧である。横断面は扁平の凸レンズ状を呈する。

撥型は（16）のタイプのみが２０点出土し、(17) の尖基式は得られていない。厚型２点、中厚手12点、扁平６点で、厚型が最も少ない（第14表)。層位的に見ると、下層の第III層で中厚手３点、扁平３点（別表４)。第II層で厚型１点、中厚手３点、扁平１点（別表３)。第Ｉ層で扁平１点（別表２)。表採品は厚型１点、中厚手６点、扁平１点で（別表１)、扁平タイプは各層で出土しているが、厚型は第II層でだけ出土している。

さて、以上を要約すると、厚型は一応各類型に認められるが、特に狭刃型の（１）～（４）に集中する傾向が見られる。中厚手は各類型にほぼ均等に分布している。扁平は（16）の撥型に多い傾向を示している。層位的には先述したようにばらつきがあり、出土量も統計的に十分とはいえず、推移を示せるような段階にない。

次に打製石斧についてみると、すべて撥型で、４点は（16）の撥型、他の１点は分類不能のものである（第14表)。これらを横断面で見ると（第14表)、厚型２点、中厚手２点、扁平１点で、層位的には最下層の第IV層で、不定形の中厚手（16B）が１点（別表５)、第III層で厚型の矩形に属する平面形不明（18）のものが１点、第II層からは厚手、中厚手、扁平が各１点、検出されている。ただ、資料が少なく、層位上の推移を知ることができないのは残念である。

２）國分資料（註３）

層位資料は11点で、すべて磨製石斧である（第15表)。狭刃型では（１）～（４）の出土はなく、（５）～（８）が５点検出されている。（１）～（４）が欠落しているせいか厚型は皆無で、中厚手が４点、扁平が１点である。短冊（12）系列は厚型（円形）１点と中厚手が１点採集されている。表札型（13）は扁平１点、撥型（16）は中厚手１点、扁平１点、不明１

第15表　下田原貝塚出土石斧の平面・断面形態（國分氏による層位資料）

□＝第Ⅰ層　○＝第Ⅱ層　他は第Ⅲ層

断面形態 ＼ タイプ		狭刃型											短冊型																	撥型										合計
		1	2	3	4	5	6		7	8		9	10	11	12						13						14			15	16						17			18	
	サブタイプ						A	B		A	B	不明			A	B	C	D	E	F	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	
厚型	△																																							
	□																																							
	○														1																									1
	⌓																																							
	⌒																																							
	⌔																																							
横 中厚手	△					[1]																																		[1]
	⬭											1																												1
	⬭					①					1																													1①
	□																																							
	⬭																1													[1]										1[1]
	不																																							
長 扁平	△																																							
	⬭																																							
	⬭																						1							1										2
	⬭																																							
	⬭																																							
	不											①																											1	1①
不明																																								
合計						①[1]					1	1①			1		1						1							1[1]									1	7②[2]

点で、短冊系列では3類型が出土しているが、狭刃型と撥型では厚型が欠けている。

層位的に見てみると（第15表）、第Ⅰ層では狭刃型の（5）と撥型（16A）がそれぞれ1点、いずれも中厚手である。第Ⅱ層では狭刃型が2点得られているが、1点は中厚手、他の1点は扁平のもので、厚型は得られていない。第Ⅲ層からは狭刃型2点、いずれも中厚手である。短冊型（12）は2点で、1点は円形の厚型、他の1例は不定形の中厚手。表札型（13）は扁平の1例だけで、それぞれ各類型が出土している。撥型（16）は扁平が2例発見されている。つまり、断面形態の各類型が第Ⅲ層で出土しているが、第Ⅰ・Ⅱ層では厚型が見られない。

3）早稲田資料（註4）

磨製石斧が8点報告されている。狭刃型1点、短冊系列3点、撥型4点である（第16表）。

狭刃型の1点は逆台形のもので、中厚手に属する。短冊系列は3点得られているが、分類不能で不明欄に記した。中厚手が2点、扁平が1点である。撥型（16）は3点で、いずれも中厚手である。尖基式（17）の1点も中厚手である。後者の資料に厚型は含まれていない。

層位的に見ると（第16表）、第Ⅰ層から短冊系列の中厚手と扁平が各1点得られ、第Ⅱ層から狭刃型1点、短冊系列1点、撥型3点、尖基式が1点得られているが、すべて中厚手である。つまり、第Ⅰ・Ⅱ層とも中厚手のみ出土したことになる。

B）大田原遺跡

1）1980年度の報告（註6）

磨製石斧39点と打製石斧5点が報告されている（第17表）。磨製石斧についてみると、狭刃型13点、短冊系列13点、撥型13点と3類型とも同数である。しかし、断面形態にはばらつきがあり、厚型は6点(15%)、中厚手は18点（46%）、扁平は15点（39%）で、中厚手が若干多い。次に、平面形と断面形の関係について見てみよう。

第17表によると、狭刃型は厚型が2点、中厚手が4点、扁平が7点である。扁平が若干多い。扁平が多いのは形態的に斧幅の広い楕円形が多く発見されたことによるが、一般的に厚型の傾向が強い（1）～（5）のサブタイプにも扁平が3点含まれており、これも平面形態と関係するものであろう。

短冊グループのうち方柱状（11）の1点は厚型に属するが、断面は丸みのある方形を呈し、第Ⅱ層で出土している。第Ⅱ層は第Ⅲa層の撹乱部分と記載されている。

短冊型（12）は厚型が2点、中厚手が5点、扁平が1点で中厚手が多い（第17表）。門札型(13)は中厚手が2点のみ出土。トランプカード型（14）は扁平が1点のみ出土。分類不能（15）の1点は短冊型か表札型のいずれかであろう。断面三角形の中厚手である。全体的に見て中厚手が多い。

撥型（16）は厚型1点、中厚手6点、扁平5点で、厚型が極端に少なく、中厚手と扁平は

第16表　下田原貝塚出土石斧の平面・断面形態（早大資料）

○は第Ⅰ層、他は第Ⅱ層

断面形態＼タイプ		狭刃型											短冊型																		撥型										合計
		1	2	3	4	5	6		7	8		9	10	11	12						13						14			15	16						17			18	
	サブタイプ						A	B		A	B	不明			A	B	C	D	E	F	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	
厚型	△																																								
	□																																								
	○																																								
	⌒																																								
	⌓																																								
	⌔																																								
横長 中厚手	△																																								
	⬭																																					1		1	
	⬭																													①	1										1①
	□																																								
	⌔					1																								1			1		1						4
	不																																								
横長 扁平	△																																								
	⬭																																								
	⬭																													①											①
	▭																																								
	⬭																																								
	不																																								
不明																																									
合計						1																								1②	1		1		1				1		6②

第17表　大田原遺跡出土石斧の平面・断面形態（県教委、1980）

断面形態 ＼ タイプ		狭刃型											短冊型																	撥型										合計
		1	2	3	4	5	6		7	8		9	10	11	12						13						14			15	16						17			18	
	サブタイプ						A	B		A	B	不明			A	B	C	D	E	F	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	
厚型	△					1									1				1																					3
	□			[1]										1																										1[1]
	○																															1								1
	⌓																																							
	⌔																																							
	⌒																																							
横厚手	△														1														1		1		1		(1)					4(1)
	⬭											1																												1
	⬭									1	1				2	(1)					1	1										1(1)	1							8(2)
	□																																							
	⌓					1					(1)				1		1													1					1					5(1)
	不																																							
長扁平	△																																							
	⬭																																							
	⬭		1								2					1																1	1							6
	⬭																															1								1
	⬭			[1]	1						2																1				(1)	1	1				1			[1]7(1)
	不																																							
不明																																								
合計			1	[2]	1	2				1	5(1)	1		1	5	1(1)	1		1		1	1					1			1	1	5(2)	3	2		1(1)		1			[2]37(5)

※（　）は打製、［　］は磨製だが、平面形が(3)か(4)か不明のもの。

ほぼ同数出土している。このことも平面形との関係を示唆するものであろう。尖基式（17）の１点も扁平に属している。

断面形態の主要な３類型が出土しているのは狭刃型・短冊型・撥型の３種だけである。層位上の推移について、この３種から見ていくことにする。

狭刃型の13点を層位別に見ると、最下層の第III層では全タイプ（厚型２点，中厚手３点，扁平３点）が出土している（別表10）。第II層ではいずれも出土がなく（別表９）、第Ｉ層で中厚手と扁平が各１点出土しているが、厚型は見られない（別表８）。つまり、いずれも上層へ減少している。表採では扁平が３点得られている（別表７）。

短冊グループのうち箸箱形の方柱状石斧（11）は第II層で１点得られ（別表９）、断面形態は方形の厚型に属する。

短冊型は厚型２点、中厚手５点、扁平１点の計８点で、層位別に見ると、厚型は下層になく、第Ｉ層で２点出土している（別表８）。中厚手は第II層では出土がなく、第Ｉ・III層で各２点出土し（別表８・10）、一応、持続している様子がうかがえる。扁平は出土がなく、表採で１点得られているだけである（別表７）。

門札型（13）は２点得られている（第17表）。層位的に見ると、第III層と第Ｉ層で各１点（別表10・８）、いずれも中厚手の楕円形である。トランプカード型は断面不定形の扁平のものが、第III層で１点（別表10）、そのほか分類不能（15）の刃部破片が表採で１点得られている（別表７）。後者は断面三角形の中厚手のものである。

撥型（16）は厚型１点、中厚手６点、扁平５点の計12点で、第III層ではすべて（厚型１点，中厚手３点，扁平２点）が出土している（別表10）。第II層では中厚手が２点出土し、他のタイプは見られない（別表９）。しかし、第Ｉ層では中厚手１点と扁平が２点出土している（別表８）。以上を要約すると、厚型は第III層でのみ出土し、中厚手は上層へ持続するが、出土量は減少し、扁平は第II層で欠如しているものの、第III・Ｉ層と一応、持続している。表採の１点は扁平である（別表７）。

尖基式はサブタイプのBが第Ｉ層で１点出土している（別表８）。断面形態は扁平グループの不定形に属するものである。

以上を要約すると、厚型は狭刃型・撥型とも第III層で出土し、上層になく、短冊型の厚型は下層ではみられず、第Ｉ層で２点出土している。中厚手は狭刃型、短冊型、撥型とも下層から上層へ連続している。扁平の狭刃型も下層から上層へ持続しているが、短冊型では出土例がなく、わずかに表採で１点得られているだけである。

打製石斧は５点で、すべて第Ｉ層からの出土である（別表８）。以下の（　）は横断面の形態を示す。狭刃型の楕円形B（中厚手の不定形）１点、短冊型B（中厚手の楕円形）１点、撥型B（中厚手の楕円と扁平の不定形）２点、同F（中厚手の三角形）１点の５点で、厚型はなく、扁平１点のほかはすべて中厚手である。

第18表　大田原遺跡出土石斧の平面・断面形態（石垣市教委、1982）

（　）は打製石斧

断面形態 ＼ タイプ		狭刃型											短冊型																		撥型										合計
		1	2	3	4	5	6		7	8		9	10	11	12						13						14			15	16					17			18	
							A	B		A	B	不明			A	B	C	D	E	F	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	
厚型	△																																1								1
	□		1			(1)																																			1(1)
	○																															1									1
	⌓																																								
	⌔																																								
	⌒																																								
横 中厚手	△														(1)	4(1)		(1)										(1)			1	2	1								8(4)
	⬭								1								1															2			1						5
	⬭										1				3	1	2													1	3	1				1					13
	□				1										1	1				(1)												1									4(1)
	⌔				1																									1	3		1						(1)		6(1)
	不																																								
長 扁平	△																																1		1						2
	⬭											1																1	1						1	1					5
	⬭																				1	1													1	2					5
	□																						1											1								2
	⌔										1						1(1)				1	1								1		1(1)	2	1	1	1					11(2)
	不																																								
不明																																									
合計			1		2	(1)			1		2	1			4(1)	6(1)	4(1)	(1)		(1)	2	2	1					1(1)	1	3	7	8(1)	6	2	5	5			(1)		64(9)

2）1982年度の報告（註7）

64点の磨製石斧と9点の打製石斧が紹介されている。

磨製石斧についてみると、第18表のように狭刃型は7点（11%）、短冊系列は24点（37%）、撥型は33点（52%）と出土量には差があり、これを断面形態で見ると、厚型3点（5%）、中厚手36点（56%）、扁平25点（39%）となり、平面形では撥型、断面形では中厚手が他を凌駕している。

まず、平面形と断面形の関係についてみると（第18表）、狭刃型は厚型1点、中厚手4点、扁平2点の計7点で、中厚手が多い。厚型の1点はカモメノクチバシ形（2）に属するもので、中厚手は（4）・（7）・（8B）の3サブタイプ、他方、扁平は楕円形（8B）と平面形不詳（9）の各1点で、平面の幅が大きいほど断面は扁平になる傾向が強い。

短冊型（12）は厚型の出土がなく、中厚手が13点、扁平が1点で、中厚手が断然多い。門札型（13）は厚型と中厚手がなく、扁平のみが5点出土し、カード型（14）は中厚手2点と扁平が3点出土している。以上のようにこの系列は中厚手と扁平に集中する傾向が見られる。

撥型（16）は厚型2点、中厚手17点、扁平14点の出土で、厚型が少なく、中厚手と扁平に偏る傾向があり、ある程度、厚さが平面形に制約されることを示唆している。

次に、上記の諸形態に推移が認められるかどうか、層位上の展開を見てみたい。

狭刃型の断面型態は3類型とも得られている。第III層からは厚型、中厚手、扁平の各1点、少数ながら全タイプが出土している（別表16）。第IIIb層では中厚手と扁平が各1点出土（別表15）、厚型は得られていない。あとは表採で中厚手が2点得られているだけである（別表11）。

短冊型（12）は第III層で最も多く、中厚手が6点、扁平が1点出土（別表16）。第IIIb層では中厚手のみが2点（別表15）、第I層でも中厚手が1点出土し（別表12）、また、表採でも4点得られ（別表11）、中厚手は断続的ながら、一応、連続する様相を示しているが、扁平は第III層以後、消えている。門札型（13）の5点はすべて扁平で（第18表）、第III層で2点（別表16）、第IIIb層で1点出土（別表15）。本遺跡では古いタイプに属している。あとは表採と第I層でそれぞれ1点得られている（別表11・12）。トランプカード型（14）は扁平のものが2点第III・IIIb層で出土しており（別表15・16）、本遺跡では最古層のものである。

撥型（16）は33点出土しており、3類の断面形態が得られている。厚型2点、中厚手17点、扁平14点で、厚型が極端に少ない（第18表）。これを層位別に見ると、第III層で厚型1点、中厚手10点、扁平4点（別表16）、第IIIb層では厚型はなく、中厚手2点、扁平5点（別表15）。第IIIa層では中厚手のみ2点（別表14）、第II層では再び厚型1点と中厚手2点（別表13）。第I層では扁平のみが4点得られ（別表12）、断続的ながら各類型が上下両層に見られる。

打製石斧は9点である。狭刃型1点、短冊型5点、カード型1点、撥型1点、尖基式1点で、短冊型が比較的多い（第18表）。狭刃型は厚型1点、短冊型は中厚手の三角形3点と矩形1点のほか不定形の扁平が1点、カード型は中厚手の三角形1点、撥型は扁平の不定形1点、

第19表　平地原遺跡採集石斧の平面・断面形態（1979）

断面形態＼タイプ＼サブタイプ		狭刃型											短冊型																		撥型										合計
		1	2	3	4	5	6		7	8		9	10	11	12						13						14			15	16						17			18	
							A	B		A	B	不明			A	B	C	D	E	F	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	
厚型	△																																								
	□													1																											1
	○																																								
	⬭																																								
	⬠																																								
	⬡																																								
横 中厚手	△					1														1													1							3
	⬭																																								
	⬭																	1															1							2
	□																																1							1
	⬠					1									1																									2
	不																																								
長 扁平	△																																								
	⬭																																								
	⬭																																								
	▭																																								
	⬭																																								
	不																																								
不明																																									
合計						2								1	1			1		1													3							9

尖基式は中厚手の不定形１点である。これを層位的に見ると、狭刃型の厚手の１点は第IIIa層で出土しているが（別表14)、他はすべて第III層からの出土で（別表16)、全体的に下層に集中している。

C）平地原遺跡

１）1979年度の報告（註８）

報告書には狭刃型２点、短冊系列４点、撥型３点の計９点が紹介されている（第19表)。

狭刃型の２例はいずれも逆台形（５）のもので、２点とも中厚手である。方柱状石斧（11)は断面が方形を呈するもので、厚型はこの１点だけである。短冊型（12）は３点で、いずれも中厚手である。撥型（16）の３点も中厚手のもので、扁平グループは採集されていない。

以上はすべて表採資料であり、層位関係は提示できない。

２）1980年度の報告（註９）

25点の磨製石斧と２点の打製石斧が報告されている（第20表)。

磨製石斧についてみると、狭刃型９点（36%)、短冊系列６点（24%)、撥型10点（40%)で、撥型が若干多く、断面形態では、厚型３点（12%)、中厚手10点（40%)、扁平12点48%)となっている。

狭刃型は厚型２点、中厚手３点、扁平４点である。厚型の２点は楔形のもので、あとの８点は(2)～(9)のサブタイプに分類できる。短冊型（12）は厚型１点、中厚手２点、扁平２点で、カード型（14）は中厚手の１点だけ。撥型（16）は中厚手４点、扁平３点、また、尖基式は扁平が３点出土。本遺跡の断面形態は中厚手と扁平が目立つ。

すべて表採品であり、層位関係は提示できない。

打製石斧は短冊型と撥型が各１点得られている（第20表)。いずれも断面形態は不定形だが、短冊型は扁平、撥型は中厚手に属している。

D）仲間第二貝塚　（註４）

磨製石斧が11点図示されている。すべて表採資料である。狭刃型１点、短冊系列５点、撥型５点である（第21表)。

狭刃型は逆台形（５）が１点で、断面形態は中厚手に属している。短冊型（12）も１点で、中厚手のものである。表札型（13）は３点あり、中厚手２点と扁平１点だが、別に平面形不明（15）の扁平石斧の破片が１点表採されている。撥型（16）は中厚手２点、扁平３点で、厚型は含まれていない。

以上、11点の表採資料について概観したが、厚型は得られておらず、すべて中厚手か扁平のものである。

第20表　平地原遺跡採集石斧の平面・断面形態（1980）

（　）は打製石斧

断面形態 ＼ タイプ		狭刃型											短冊型																	撥型										合計
		1	2	3	4	5	6		7	8		9	10	11	12						13						14			15	16						17			18	
	サブタイプ						A	B		A	B	不明			A	B	C	D	E	F	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	
厚型	△	2																																						2
	□																																							
	○																																							
	⌓																																							
	⌒																																							
	⌓																																							
	⌒																1																							1
横 中厚手	△																										1													1
	⬭		1																	1																				2
	⬭										2																					1	1	1		1				6
	□																																							
	⬠																		1													(1)								1(1)
	不																																							
長 扁平	△																														1	1						1		3
	⬭																	1																						1
	⬭					1						1																			1							1		4
	⬭																																							
	⬭				1			1							1		(1)																				1			4(1)
	不																																							
不明																																								
合計		2	1		1	1		1			2	1			1		1(1)	1	1	1							1				2	2(1)	1	1		1		1	2		25(2)

第21表　仲間第二貝塚出土石斧の平面・断面形態

断面形態 ＼ タイプ		狭刃型											短冊型																		撥型										合計
		1	2	3	4	5	6		7	8		9	10	11	12						13						14			15	16						17			18	
	サブタイプ						A	B		A	B	不明			A	B	C	D	E	F	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	
厚型	△																																								
	□																																								
	○																																								
	⌀																																								
	⌂																																								
	⬭																																								
横 中厚手	△																					1																			1
	⬭					1																																			1
	⌀																																								
	□																																								
	⬬																1						1										1	1							4
	不																																								
長 扁平	△																																								
	⬭																																								
	⌀																																								
	▭																														1										1
	⬭																					1								1					1	1					4
	不																																								
不明																																									
合計						1											1					2	1							1	1			1	2	1					11

第22表　フーネ遺跡採集石斧の平面・断面形態

断面形態 ＼ タイプ		狭刃型											短冊型																		撥型										合計
		1	2	3	4	5	6		7	8		9	10	11	12						13						14			15	16						17			18	
	サブタイプ						A	B		A	B	不明			A	B	C	D	E	F	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	
厚型	△																																								
	□													1																											1
	○																																								
	⌓																																								
	⌔																																								
	⌒																																								
横 中厚手	△																																								
	⬭																																								
	⬭																																								
	□																																								
	⌓																																								
	不																																								
長 扁平	△																																								
	⬭																																								
	⬭																				1																				1
	▭																																								
	⬭		1																																						1
	不																																								
不明																																									
合計			1											1							1																				3

E）フーネ遺跡　(註10)

磨製石斧が3点採集されている（第22表)。狭刃型の1点はカモメノクチバシ形（2）に属し、扁平の断面形態を有する。方柱状の石斧（11）は層位資料であり、断面は方形だが、無土器時代の可能性が高く、小文では除外することにする。門札型（13）の1点は比較的形が整っており、断面形態は扁楕円形に属する。方柱状以外の2点の石斧も先述したようにフーネ第1遺跡のものか、第2遺跡のものか、現時点では不明である。

小　　結

以上、平面・断面の相関関係を見てきた。今のところ明確な相関関係は見受けられないが、両者間にある種の傾向のようなものは指摘できる。

前項で取りあげた5遺跡（9報告）の資料について、以下のように要点をまとめておきたい。ただし、國分による下田原貝塚の表採資料53点は先述したように大泊浜貝塚の資料を含む可能性があり、他方、フーネ遺跡の資料も時代が特定できないので本稿では除外する。

磨製石斧227点のうち、厚型は25点（11%)、中厚手は127点（約56%)、扁平は75点（33%)で、予想していたより厚型は少ない（第13表)。

次に厚型と平面形との関係についてみると（別表22)、厚型28点のうち狭刃型は14点（約50%)、短冊系列は9点（約32%)、撥型は5点（約18%）で、狭刃型に厚型が最も多い。短冊型系列の中にはフーネ遺跡の無土器時代の方柱状石斧が1点含まれており、それを除くと短冊系列は8点となり、これを総計の27点で除すると厚型は14点(約52%)、短冊系列は8点(約30%)、扁平5点（約18%）となる。つまり、厚型は狭刃型に最も多く、次いで短冊系列、そして撥型に最も少ないということになる。また、狭刃型についてみると、先端が鋭角に尖る楔形に厚型は集中しており、次いで尖刃的傾向の強いカモメノクチバシ形（2）～逆台形（4）に多く、斧幅のやや広い鉋型（6）～楕円形（8）は中厚手か扁平の形態をとる傾向がある。なお、狭刃型でも（2）～（5）のサブタイプは中間型に属し、厚型だけでなく、中厚手・扁平も比較的多い。短冊系列の中では典型的な短冊型に厚型が比較的多い。

次に、中厚手127点についてみると（別表23)、狭刃型30点（23%)、短冊系列48点（38%)、撥型49点（39%）で、短冊系列と撥型はほぼ同数である。両類型とも中厚手と深く結びついていることが分かる。ここではまた、狭刃型も比較的多い。このことは前述したように斧幅のやや広い狭刃グループと関係するものであろう。

扁平の断面形態をもつものは狭刃型が17点（約23%)、短冊系列が21点（28%)、撥型が37点（49%）で、撥型が圧倒的に多い(別表24)。短冊系列は撥型の約半数である。このような比率も断面と平面の密接な関係を示するものであろう。狭刃型は17点得られており、中厚手に比べると減少しているが、前項で述べた（6）～（8）のサブタイプに扁平が比較的集中

している。なお、短冊グループからフーネ遺跡の１点を除いた合計を74点で除すると、狭刃型17点（23%）短冊型20点（27%）、撥型37点（50%）となる。

さて、八重山型石斧の特徴の一つに「断面三角形」の形態を指摘することが多い。上記５遺跡の資料について調べてみたところ（別表25）、37点報告されている。総数230点の中でみると、約16%である。断面三角形の石斧は確かに八重山型石斧の特徴の一つではあるが、出現率は予想に反して低い。この37点を厚／幅の比率でみてみると（別表25）、厚型12点（32%）、中厚手20点（54%）、扁平５点（14%）と中厚手に最も多く、次いで厚型、そして扁平のものが最も少ない。このことが機能とどのように関係するのか、今後の課題である。

Ⅳ　おわりに

以上、５遺跡の資料について平面形および断面形の特徴を探ってみた。

まず、平面形について見ると（第23表）、國分による下田原貝塚の表採資料53点を除いた（第23表の284点－53点）231点の磨製石斧は狭刃型62点（27%）、短冊系列78点（34%）、撥型91点（39%）となる（別表26）。この中にはフーネ遺跡の時期不詳の３点も含まれるから、この３点を除くと狭刃型61点（27%）、短冊系列76点（33%）、撥型91点（40%）となる（別表26）。撥型が最も多いが、狭刃型も３割近くあり、先述したように八重山型石斧の主要な形態の一つと見ることができる。狭刃型は沖縄諸島以北に稀少で、八重山地方独特の石斧と見ていい。細分した狭刃型の８種のサブタイプについては、前項で指摘したように今後の資料によっては再検討が必要である。

石斧の両側面が平行もしくは近似のものを短冊系列として取扱った。この系列にはカプセル形（表番号10、以下同じ）、箸箱形（11）、典型的な短冊型（12）、門札型（13）、カード型（14）の５種が含まれる。國分による下田原貝塚の表採資料22点とフーネ遺跡の２点を除いた76点についてみると、カプセル形１点、箸箱形２点（第23表、３点－１点）、典型的な短冊型45点（第23表、50点－５点）、門札型16点（第23表、25点－９点）、カード型５点、不明７点（第23表、15点－８点）となる（第23表）。

以上のように短冊系列の中では典型的な短冊型が圧倒的に多い。表札タイプがこれに次ぐ。カード型は出土量こそ少ないが、特異な存在である。また、箸箱状を呈する方柱状片刃石斧の出土も注目すべきもので、これも出土量は少ないが、この時期にはすでに存在していたと見ていいだろう。

撥型は最も普遍的なタイプで、40%前後の出土量である。撥型については前項で詳述したので省略するが、この類型の中に尖基式が８点あり、出土量は少ないものの、特異な形態の石斧として念頭に置いておきたい。

石斧の横断面の形態は基本的には厚型と扁平に大別できる。後者の扁平には厚型に近い、

第23表　下田原式時代石斧の平面形態　　（　）は打製石斧、［　］は磨製だが平面形が(3)か(4)か不明のもの

タイプ	狭刃型											短冊型																			撥型										合計
サブタイプ	1	2	3	4	5	6		7	8		9	10	11	12						13						14			15	16						17			18	
遺跡						A	B		A	B	不明			A	B	C	D	E	F	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	
下田原貝塚(県教委)	5	6		2	2	2	4		1	1		1		4	3	3	2			1	2	1		1			1			4	6(1)	6(2)	2	1	1(1)				(1)	62(5)
下田原貝塚(早大)					1																								2(1)	1		1		1				1		7(1)
下田原貝塚(國分)					2					1	2			1		1						1								2									1	11
下田原貝塚(國分、表採)	1				5						2	1		1	1	2		1		2		4		1	1				8	5	1	2	4	5	2			3	1	53
大田原遺跡(1979)		1	[2]	1	2				1	5(1)	1		1	5	1(1)	1		1		1	1					1			1	1	5(2)	3	2		1(1)		1			[2] 37(5)
大田原遺跡(1982)		1		2	(1)			1		2	1			4(1)	6(1)	4(1)	(1)	(1)		2	2	1					1(1)	1	3	7(1)	8	6	2	5	5			(1)		64(9)
平地原遺跡(1979)					2								1	1			1		1														3							9
平地原遺跡(1980)	2	1		1	1		1			2	1			1		1(1)	1	1	1							1				2	2(1)	1	1		1		1	2		25(2)
仲間第二貝塚					1											1					2	1							1	1			1	2	1					11
フーネ遺跡		1											1							1																				3
合計	8	10	[2]	6	16 (1)	2	5	1	2	11 (1)	7	2	3	17 (1)	11 (2)	13 (2)	4 (1)	3 (1)	2	7	7	8		2	1	2	2 (1)	1	15 (1)	23 (1)	22 (4)	19 (2)	15	14	11 (2)		2	6 (1)	2 (1)	282 [2](22)

いわば両者の中間タイプも含まれる。そのため便宜上、扁平のグループを二分して、中厚手と典型的な扁平の2種を設定した。

フーネ遺跡の3点と下田原貝塚の國分による表採資料53点を除いた225点の断面形態についてみると（第13表の小計)、厚型は25点（11%)、中厚手は127点（56%)、扁平は75点（33%)で、中間の中厚手グループが断然多い。厚型は11%と少ないが、それでも目に留まる存在である。厚型は下田原貝塚や大田原遺跡から若干の報告はあるが、他の遺跡での出土例は少なく、遺跡間に偏りが見られる。上記3型態（厚型・中厚手・扁平）の層位上の推移を検討してみたが、全体量が少なく、有効な結果は得られなかった。

最後に、平面形と断面型の相関関係であるが、先述したように現時点で明確な相関関係は見出せない。しかし、断面型態の厚型は狭刃型に比較的多く、扁平タイプに少ないという傾向が見られ、また、中厚手は短冊系列や撥型に多く、そして扁平タイプは圧倒的に撥型に多いという結果が表から読みとれる。また、狭刃型の中で厚型は、楔形に集中する傾向がある。各遺跡について層位上の出土表を作成し（別表1～16)、上記各型態の推移を検討してみたが、ここでも有効な結果は得られなかった。

以上、概観したように、小文では有土器時代の石斧について平面形・断面形および両者の相関関係の有無等について検討を加えてみた。

平面形についていえば、短冊型・門札型・撥型の3類型を6種のサブタイプに分け、それぞれのサブタイプ間に有意差が認められるかどうかチェックしてみたが、現在のところ、肯定的な答えは得られていない。しかし、石斧の3型態、つまり狭刃型・短冊型（グループ)および撥型などの型態分類は有効で、特に狭刃型の存在は八重山型石斧の注目すべき特色の一つといえる。狭刃型石斧が生業の一端を反映した産物であることは間違いないし、その用途が何であったか、性格解明には興味津々たるものがあるが、他方、八重山先史文化のルーツを探る際の鍵を握っているようにも見受けられる。この狭刃型石斧は、出土量こそ若干減少しているものの、後続の無土器時代の石斧文化にも継承されている。このような事実に着目すると、有土器時代の下田原式土器文化と無土器時代の石斧文化は系統的に連繋する可能性もある。両者の系統関係については今後、平面形以外にも検討項目を広げ、多角的に吟味していきたいと考えている。

断面型態も厚型・中厚手・扁平の3類型に分け、各類型にそれぞれ5ないし6つのサブタイプを設け、それらの出土頻度および層位的変化を検討してみたが、石斧の絶対数や有効な層位資料が少なく、予期したような成果は得られていない。しかし、平面形と断面形の相関関係という視点で捉えると、先述のように厚型は狭刃型に多く、中厚手と扁平タイプは短冊型や撥型に多いという傾向は見受けられる。上記の平面形と断面形が石斧の機能とどのように結びつくのか、今後の課題である。

ところで、平面形・断面形とも実際に細分していく場合、どのサブタイプに分類すべきか迷うことが多い。このことは一言でいえば、八重山型石斧の雑な平面・断面形態に基因しているが、石斧個々のラフな形態は意図的な製作行為に基づく結果と見るよりも、製作の過程で偶然にできた形態と見られ、このことがサブタイプにおける分類を困難にしている。現時点で、サブタイプ間に有意差は見いだせないが、今回設定した上記各種サブタイプの有効性の有無については未だ見通しが得られず、今暫く上記の細分にしたがって八重山型石斧の観察を続けていきたいと考えている。

なお、先述したように、今回の分析を通して予期したような成果は得られなかったものの、問題の所在や解決の糸口がおぼろげながら見えてきたことは一つの収穫であった。小文をたたき台として提出したい。

今回も時間の都合で、検討すべき問題（例えば、各遺跡間の時間差の問題や側縁部における抉りの問題など）を幾つか残してしまったが、これらの問題については次回に取り上げたい。本来なら石斧を一つびとつ手にとって観察し、考察すべきであるが、時間上の制約があって今回も報告書の実測図や観察表に頼った。誤解や見落としも多いことと思う。拙文についてお気づきの点、ご教示いただければ幸いである。

謝辞　小文を草するに当たり、今回も各遺跡の報告書を活用させていただいた。詳細な報告書を作成された方々に心からの敬意を表したい。また、図表の作成に当たって、山本正昭、安座間　充両君のお世話になった。以上の方々に心からのお礼を申し上げたい。

図表に引用した文献

註11　Pearson R., et al "Subsistence and Settlement in Okinawan Prehistory-Kume and Iriomote" Laboratory of Archaeology, University of British Columbia, Vancouver, Canada, 1981

註12　『与那国島トゥグル浜遺跡』沖縄県文化財調査報告書第66集、沖縄県教育委員会、1985

註13　金武正紀・阿利直治「神田貝塚」『石垣島県道改良工事に伴う発掘調査報告』沖縄県教育委員会、1980

註14　『崎枝赤崎貝塚』石垣市文化財調査報告書第10号、石垣市教育委員会、1987

註15　『ナガラ原貝塚・船越貝塚』沖縄県文化財調査報告書第24集、沖縄県教育委員会、1979

資　料　編

別表１　下田原貝塚表採石斧の平面・断面形態（県教委）

断面形態 ＼ タイプ		狭刃型											短冊型																	撥型										合計
		1	2	3	4	5	6		7	8		9	10	11	12						13						14			15	16						17			18	
	サブタイプ						A	B		A	B	不明			A	B	C	D	E	F	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	
厚型	△	1	3																																					4
	□														1																									1
	○				1																											1								2
	⌓																																							
	⌔																																							
	⌒	1																																						1
横長 中厚手	△																															1								1
	⬭																																							
	⬭									1						1	1	1					1								2	2	1								10
	□														1																									1
	⌓																																							
	不																																							
横長 扁平	△																																							
	⬭																											1												1
	⬭																															1								1
	⬭																																							
	⬭																																							
	不																																							
不明																																								
合計		2	3		1					1					2	1	1	1					1					1			2	3	3								22

別表２　下田原貝塚第Ⅰ層出土石斧の平面・断面形態（県教委）

断面形態＼タイプ		狭刃型											短冊型																		撥型										合計
		1	2	3	4	5	6		7	8		9	10	11	12						13						14			15	16						17			18	
	サブタイプ						A	B		A	B	不明			A	B	C	D	E	F	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	
厚型	△																																								
	□																																								
	○																																								
	⌒																																								
	⌓																																								
	⌔																																								
横 中厚手	△																																								
	⌔																																								
	⌓					1	1						1																												3
	□						1																																		1
	⌔														1			1																							2
	不																																								
長 扁平	△																																								
	⌔																																								
	⌓																2																								2
	□																																								
	⌔																																	1							1
	不																																								
不明																																									
合計						1	2						1		1		2	1															1								9

別表3　下田原貝塚第Ⅱ層出土石斧の平面・断面形態（県教委）　　（　）は打製石斧

断面形態 ＼ タイプ		狭刃型											短冊型																	撥型										合計
		1	2	3	4	5	6		7	8		9	10	11	12						13						14			15	16						17			18	
	サブタイプ						A	B		A	B	不明			A	B	C	D	E	F	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	
厚型	△																																							
	□																																							
	○																																							
	⬭																																1							1
	⬠																																							
	⬡		1																																(1)					1(1)
横 中厚手	△																																							
	⬭																													1										1
	⬯							2																																2
	□		1								1				1	1														1	(1)	1								6(1)
	⬠	1																																						1
	不																																							
長 扁平	△																																							
	⬭																															(1)								(1)
	⬯							2																																2
	▭																																							
	⬠	1																				1									1									3
	不																																							
不明																																								
合計		2	2					4			1				1	1						1								2	1(1)	1(1)	1		(1)					17(3)

別表４　下田原貝塚第Ⅲ層出土石斧の平面・断面形態（県教委）

（　）は打製石斧

断面形態＼タイプ		狭刃型											短冊型																	撥型										合計
		1	2	3	4	5	6		7	8		9	10	11	12						13						14			15	16						17			18	
	サブタイプ						A	B		A	B	不明			A	B	C	D	E	F	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	
厚型	△	1																				1																		2
	□																																						(1)	(1)
	○																																							
	⬭					1																																		1
	⬠																																							
	⬡																																							
横長 中厚手	△																															1								1
	⬭																								1															1
	⬭		1		1											1																1	1								5
	□																				1																				1
	⬡																																							
	不																																							
横長 扁平	△																																							
	⬭																																							
	⬭																																1		1					2
	▭																																							
	⬭																																	1						1
	不																																							
不明																																								
合計		1	1		1	1										1					1	1			1							2	1	1	1	1				(1)	14(1)

別表５　下田原貝塚第Ⅳ層出土石斧の平面・断面形態（県教委）　　（　）は打製石斧

断面形態 ＼ タイプ ＼ サブタイプ		狭刃型											短冊型																	撥型										合計
		1	2	3	4	5	6		7	8		9	10	11	12						13						14			15	16						17			18	
							A	B		A	B	不明			A	B	C	D	E	F	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	
厚型	△																																							
	□																																							
	○																																							
	⬭																																							
	⬠																																							
	⬡																																							
横 中厚手	△																																							
	⬭																																							
	⬭																																							
	□																																							
	⬬																															(1)								(1)
	不																																							
長 扁平	△																																							
	⬭																																							
	⬭																																							
	▭																																							
	⬬																																							
	不																																							
不明																																								
合計																																(1)								(1)

別表６　下田原貝塚表採石斧の平面・断面形態（國分資料）

断面形態 ＼ タイプ		狭刃型											短冊型																	撥型										合計
		1	2	3	4	5	6		7	8		9	10	11	12						13						14			15	16						17			18	
	サブタイプ						A	B		A	B	不明			A	B	C	D	E	F	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	
厚型	△																1																	1						2
	□																																							
	○												1																											1
	⌓																																							
	⌔																													2										2
	⌖																																							
横 中厚手	△	1										1			1															1			1		1				1		7
	⬭					2													1		2										2								1	8
	⬭					2										1							1		1	1				2								1		9
	□																																							
	⌔																														1		1							2
	不											1																												1
長 扁平	△																													1										1
	⬭																1						1							1		2			3	1				9
	⬭																						2										3							5
	▭																																							
	⬭					1																								1	1			1		1			1		6
	不																																							
不明																																								
合計		1				5						2	1		1	1	2		1		2		4		1	1				8	4	2	2	4	5	2			3	1	53

別表７　大田原遺跡表採石斧の平面・断面形態（県教委、1980）

断面形態＼タイプ		狭刃型											短冊型																		撥型										合計
		1	2	3	4	5	6		7	8		9	10	11	12						13						14			15	16						17			18	
	サブタイプ						A	B		A	B	不明			A	B	C	D	E	F	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	
厚型	△																																								
	□																																								
	○																																								
	⌂																																								
	⌂																																								
	⌂																																								
横長 中厚手	△																													1											1
	⬭																																								
	⬭																																								
	□																																								
	⌂														1																										1
	不																																								
横長 扁平	△																																								
	⬭																																								
	⬭		1								1					1																1									4
	⬭																																								
	⬭										1																														1
	不																																								
不明																																									
合計			1								2				1	1														1		1									7

別表 8　大田原遺跡第Ⅰ層出土石斧の平面・断面形態（県教委、1980）　　（　）は打製石斧

断面形態 ＼ タイプ		狭刃型											短冊型																		撥型										合計
		1	2	3	4	5	6		7	8		9	10	11	12						13						14			15	16						17			18	
	サブタイプ						A	B		A	B	不明			A	B	C	D	E	F	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	
厚型	△														1				1																						2
	□																																								
	○																																								
	⌒																																								
	⌓																																								
	⌔																																								
横長 中厚手	△														1																					(1)					1(1)
	⬭																																								
	⬭									1						(1)						1										(1)									2(2)
	□																																								
	⌔										(1)						1													1											2(1)
	不																																								
横長 扁平	△																																								
	⬭																																								
	⬭										1																					1									2
	▭																																								
	⬭																															(1)	1					1			2(1)
	不																																								
不明																																									
合計										1	1(1)				2	(1)	1		1			1									1	1(2)	1			(1)		1			11(5)

別表９　大田原遺跡第Ⅱ層出土石斧の平面・断面形態（県教委、1980）

断面形態 ＼ タイプ		狭刃型											短冊型																		撥型										合計
		1	2	3	4	5	6		7	8		9	10	11	12						13						14			15	16						17			18	
	サブタイプ						A	B		A	B	不明			A	B	C	D	E	F	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	
厚型	△																																								
	□													1																											1
	○																																								
	⌓																																								
	⏢																																								
	⬭																																								
横長 中厚手	△																																	1							1
	⬭																																								
	⌓																																								
	□																																								
	⏢																																		1						1
	不																																								
横長 扁平	△																																								
	⬭																																								
	⬭																																								
	▭																																								
	⬭																																								
	不																																								
不明																																									
合計														1																				1		1					3

別表10　大田原遺跡第III層出土石斧の平面・断面形態（県教委、1980）　　[　] は磨製だが、（3）か（4）が不明のもの

断面形態＼タイプ		狭刃型											短冊型																		撥型										合計
		1	2	3	4	5	6		7	8		9	10	11	12						13						14			15	16						17			18	
	サブタイプ						A	B		A	B	不明			A	B	C	D	E	F	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	
厚型	△					1																																			1
	□			[1]																																					[1]
	○																															1									1
	⌓																																								
	⌔																																								
	⌓																																								
横長 中厚手	△																															1									1
	⬭											1																													1
	⬭										1				2						1											1	1								6
	□																																								
	⬭					1																																			1
	不																																								
横長 扁平	△																																								
	⬭																																								
	⬭																																								
	⬭																															1									1
	⬭			[1]1							1																1						1								4[1]
	不																																								
不明																																									
合計				[2]1		2					2	1			2						1						1					4	1	1							16[2]

別表11　大田原遺跡表採石斧の平面・断面形態（石垣市教委、1982）

断面形態＼タイプ		狭刃型											短冊型																	撥型										合計
		1	2	3	4	5	6		7	8		9	10	11	12						13						14			15	16						17			18	
	サブタイプ						A	B		A	B	不明			A	B	C	D	E	F	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	
厚型	△																																							
	□																																							
	○																																							
	⌂																																							
	⏢																																							
	⬭																																							
横長 中厚手	△																																							
	⬭								1																									1						2
	⬭														2		1																							3
	□														1																									1
	⬭				1																																			1
	不																																							
横長 扁平	△																																							
	⬭																																		1					1
	⬭																																							
	⬭																																							
	⬭																					1																		1
	不																																							
不明																																								
合計					1				1						3		1					1												1	1					9

別表12　大田原遺跡第Ⅰ層出土石斧の平面・断面形態（石垣市教委、1982）

断面形態 ＼ タイプ		狭刃型											短冊型																	撥型										合計
		1	2	3	4	5	6		7	8		9	10	11	12						13						14			15	16						17			18	
	サブタイプ						A	B		A	B	不明			A	B	C	D	E	F	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	
厚型	△																																							
	□																																							
	○																																							
	⌓																																							
	⏢																																							
	⏢																																							
横 中厚手	△															1																								1
	⬭																																							
	▭																																							
	□																																							
	⌓																																							
	不																																							
長 扁平	△																															1								1
	⬭																																							
	▭																																	1						1
	▭																					1																		1
	⬭																															1			1					2
	不																																							
不明																																								
合計																1						1										2		1	1					6

別表13　大田原遺跡第Ⅱ層出土石斧の平面・断面形態（石垣市教委、1982）

断面形態 ＼ タイプ		狭刃型											短冊型																	撥型										合計
		1	2	3	4	5	6		7	8		9	10	11	12						13						14			15	16						17			18	
	サブタイプ						A	B		A	B	不明			A	B	C	D	E	F	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	
厚型	△																																							
	□																																							
	○																														1									1
	⌓																																							
	⌔																																							
	⌒																																							
横 中厚手	△																														1									1
	⬭																																							
	⬯																																							
	□																														1									1
	⬬																																							
	不																																							
長 扁平	△																																							
	⬭																																							
	⬯																																							
	▭																																							
	⬬																																							
	不																																							
不明																																								
合計																															3									3

別表14　大田原遺跡第III a 層出土石斧の平面・断面形態（石垣市教委、1982）

（　）は打製石斧

断面形態 ＼ タイプ		狭刃型											短冊型																		撥型										合計
		1	2	3	4	5	6		7	8		9	10	11	12						13						14			15	16						17			18	
	サブタイプ						A	B		A	B	不明			A	B	C	D	E	F	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	
厚型	△																																								
	□					(1)																																			(1)
	○																																								
	⌓																																								
	⏢																																								
	⬭																																								
横長 中厚手	△																																								
	⬭																																								
	⬭																																				1				1
	□																																								
	⬭																																1								1
	不																																								
横長 扁平	△																																								
	⬭																																								
	⬭																																								
	▭																																								
	⬭																																								
	不																																								
不明																																									
合計						(1)																											1			1					2(1)

別表15　大田原遺跡第III b 層出土石斧の平面・断面形態（石垣市教委、1982）

断面形態 ＼ タイプ		狭刃型											短冊型																	撥型										合計
		1	2	3	4	5	6		7	8		9	10	11	12						13						14			15	16						17			18	
	サブタイプ						A	B		A	B	不明			A	B	C	D	E	F	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	
厚型	△																																							
	□																																							
	○																																							
	⌂																																							
	⏢																																							
	⬭																																							
横 中厚手	△															2																1								3
	⬭																															1								1
	▭																																							
	□				1																																			1
	⌂																																							
	不																																							
長 扁平	△																																							
	⬭											1																1						1						3
	▭																				1																			1
	▭																																	1						1
	⬭																															1	1	1						3
	不																																							
不明																																								
合計					1							1				2					1							1				3	1	2	1						13

別表16　大田原遺跡第III層出土石斧の平面・断面形態（石垣市教委、1982）　　（　）は打製石斧

断面形態 ＼ タイプ		狭刃型											短冊型																		撥型										合計
		1	2	3	4	5	6		7	8		9	10	11	12						13						14			15	16						17			18	
	サブタイプ						A	B		A	B	不明			A	B	C	D	E	F	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	A	B	C	D	E	F	A	B	C	不明	
厚型	△																																1								1
	□		1																																						1
	○																																								
	⌂																																								
	⌂																																								
	⌂																																								
横 中厚手	△														(1)	1(1)		(1)										(1)			1		1								3(4)
	⬭																1															1									2
	⬭										1				1	1	1													1	3	1									9
	□															1			(1)																						1(1)
	⬭																													1	3								(1)		4(1)
	不																																								
長 扁平	△																																	1							1
	⬭																												1												1
	⬭																					1													2						3
	⬭																																								
	⬭										1						1(1)				1									1	(1)			1							5(2)
	不																																								
不明																																									
合計			1								2				1(1)	3(1)	3(1)	(1)	(1)		1	1						(1)	1	3	7(1)	2	2		2	2			(1)		31(8)

別表17　下田原貝塚出土石斧の平面・断面形態の層位別出土状況（県教委）

A）狭刃型

タイプ＼層	厚　型	中厚手	扁　平	計
表採	6	1		7
I 層		3		3
II 層	1	5	3	9
III 層	2	2		4
計	9	11	3	23

B）短冊型

タイプ＼層	厚　型	中厚手	扁　平	計
表採	1	4		5
I 層		2	2	4
II 層		2		2
III 層		1		1
計	1	9	2	12

C）門札型

タイプ＼層	厚　型	中厚手	扁　平	計
表採		1		1
I 層				
II 層			1	1
III 層	1	2		3
計	1	3	1	5

D）撥型

タイプ＼層	厚　型	中厚手	扁　平	計
表採	1	6	1	8
I 層			1	1
II 層	1	3	1	5
III 層		3	3	6
計	2	12	6	20

別表18　下田原貝塚出土石斧の平面・断面形態の層位別出土状況（國分資料）

A）狭刃型

タイプ／層	厚　型	中厚手	扁　平	計
表採				
I 層		1		1
II 層		1	1	2
III 層		2		2
計		4	1	5

B）短冊型・門札型

タイプ／層	厚　型	中厚手	扁　平	計
表採				
I 層				
II 層				
III 層	1	1	1	3
計	1	1	1	3

C）撥型

タイプ／層	厚　型	中厚手	扁　平	計
表採				
I 層		1		1
II 層				
III 層			2	2
計		1	2	3

D）表採資料

タイプ／層	厚　型	中厚手	扁　平	計
表採	5	27	21	53
I 層				
II 層				
III 層				
計	5	27	21	53

別表19　下田原貝塚出土石斧の平面・断面形態の層位別出土状況（早大資料）

A）狭刃型

タイプ／層	厚　型	中厚手	扁　平	計
表採				
I 層				
II 層		1		1
III 層				
計		1		1

B）短冊型

タイプ／層	厚　型	中厚手	扁　平	計
表採				
I 層		1	1	2
II 層		1		1
III 層				
計		2	1	3

C）撥型

タイプ／層	厚　型	中厚手	扁　平	計
表採				
I 層				
II 層		3		3
III 層				
計		3		3

D）尖基式

タイプ／層	厚　型	中厚手	扁　平	計
表採				
I 層		1		1
II 層				
III 層				
計		1		1

別表20　大田原遺跡出土石斧の平面・断面形態（1980年度）

A）狭刃型

タイプ／層	厚　型	中厚手	扁　平	計
表採			3	3
I 層		1	1	2
II 層				
III 層	2	3	3	8
計	2	4	7	13

B）短冊型

タイプ／層	厚　型	中厚手	扁　平	計
表採		1	1	2
I 層	2	2		4
II 層				
III 層		2		2
計	2	5	1	8

C）門札型

タイプ／層	厚　型	中厚手	扁　平	計
表採				
I 層		1		1
II 層				
III 層		1		1
計		2		2

D）撥型

タイプ／層	厚　型	中厚手	扁　平	計
表採			1	1
I 層		1	2	3
II 層		2		2
III 層	1	3	2	6
計	1	6	5	12

別表21　大田原遺跡出土石斧の平面・断面形態（1982年度）

A）狭刃型

タイプ／層	厚型	中厚	扁平	計
表採		2		2
I 層				
II 層				
IIIa層				
IIIb層		1	1	2
III層	1	1	1	3
計	1	4	2	7

B）短冊型

タイプ／層	厚型	中厚	扁平	計
表採		4		4
I 層		1		1
II 層				
IIIa層				
IIIb層		2		2
III層		6	1	7
計		13	1	14

C）門札型

タイプ／層	厚型	中厚	扁平	計
表採			1	1
I 層			1	1
II 層				
IIIa層				
IIIb層			1	1
III層			2	2
計			5	5

D）カード型

タイプ／層	厚型	中厚	扁平	計
表採				
I 層				
II 層				
IIIa層				
IIIb層			1	1
III層			1	1
計			2	2

E）撥型

タイプ／層	厚型	中厚	扁平	計
表採		1	1	2
I 層			4	4
II 層	1	2		3
IIIa層		2		2
IIIb層		2	5	7
III層	1	10	4	15
計	2	17	14	33

別表22　横断面厚型石斧と平面形態の遺跡別出土状況　　( ) は表採

タイプ / 遺跡	狭刃型	短冊型						撥型		18	計	備考
		10	11	12	13	14	15	16	17			
下田原貝塚(県)	9			1	1			2			13	
下田原貝塚(國分)		(1)		1(1)			(2)	(1)			1(5)	()は表採
下田原貝塚(早大)												出土なし
1980 大田原遺跡	2		1	2				1			6	
1982 大田原遺跡	1							2			3	
1979 平地原遺跡			1								1	
1980 平地原遺跡	2			1							3	
フーネ遺跡			1								1	
仲間第二貝塚												出土なし
計	14	(1)	3	5(1)	1		(2)	5(1)			28(5)	

別表23　横断面中厚手石斧と平面形態の遺跡別出土状況　　( ) は表採

タイプ / 遺跡	狭刃型	短冊型						撥型		18	計	備考
		10	11	12	13	14	15	16	17			
下田原貝塚(県)	11	1		9	3			12			36	
下田原貝塚(國分)	4(7)			1(10)				1(6)	(2)	(1)	6(26)	()は表採
下田原貝塚(早大)	1						2	3	1		7	
1980 大田原遺跡	4			5	2		1	6			18	
1982 大田原遺跡	4			13			2	17			36	
1979 平地原遺跡	2			3				3			8	
1980 平地原遺跡	3			2		1		4			10	
フーネ遺跡												出土なし
仲間第二貝塚	1			1	2			2			6	
計	30(7)	1		34(10)	7	1	5	48(6)	1(2)	(1)	127(26)	

別表24　横断面扁平石斧と平面形態の遺跡別出土状況　　( ) は表採

平面タイプ / 遺跡	狭刃型	短冊型						撥型		18	計	備考
		10	11	12	13	14	15	16	17			
下田原貝塚(県)	3			2	1			6			12	
下田原貝塚(國分)	1(1)			(1)	1(3)		(3)	1(12)	(1)	1	4(21)	()は表採
下田原貝塚(早大)							1				1	
1980 大田原遺跡	7			1		1		5	1		15	
1982 大田原遺跡	2			1	5	2	1	14			25	
1979 平地原遺跡												出土なし
1980 平地原遺跡	4			2				3	3		12	
フーネ遺跡					1						1	
仲間第二貝塚					1		1	3			5	
計	17(1)			6(1)	9(3)	3	3(3)	32(12)	4(1)	1	75(21)	

別表25　断面三角形石斧の遺跡別出土状況

遺跡 / 断面タイプ	下田原貝塚（県教委）	下田原貝塚（国分資料）	下田原貝塚（早大資料）	大田原遺跡（一九八〇）	大田原遺跡（一九八二）	平地原遺跡（一九七九）	平地原遺跡（一九八〇）	フーネ遺跡	仲間第二貝塚	合計
厚型	6			3	1		2			12
中厚手	2	1		4	8	3	1		1	20
扁平					2		3			5
合計	8	1		7	11	3	6		1	37

別表26　有土器時代磨製石斧の平面形態出土数

番号	遺　跡　名	狭　刃	短　冊	撥　型	計
1	下田原貝塚（県教委）	23	19	20	62
2	下田原貝塚（國分）	5	3	3	11
3	下田原貝塚（早大）	1	2	4	7
4	大田原遺跡（1980）	13	13	13	39
5	大田原遺跡（1982）	7	24	33	64
6	仲間第二貝塚	1	5	5	11
7	平地原遺跡（1979）	2	4	3	9
8	平地原遺跡（1980）	9	6	10	25
9	フーネ遺跡	1	2		3
合計（含フーネ遺跡）		62	78	91	231
合計（除フーネ遺跡）		61	76	91	228